三〇

「（竪帳）（表紙）
延宝八年庚　　壱番
問屋御用留之写
申五月ヨリ　　享保十五 明和二酉　年迄
」

問屋古代御達書并御用留之写　壱番

一（朱）
○　覚

一中山備前守殿并御老中・御鷹匠衆江者、跡方之通り無相違出シ可申事
一右之外何方ゟ申来り候とも、駄賃五割増之積ニ庄屋挨拶申候而、合点ニ候者出シ可申候、無左候者出シ申間敷候、尤右増銭五割ゟ上ニ者取申間敷事

御町奉行所

延宝八年
申　五月十九日

右者西之内横折江認申候書付、先役ゟ相廻り候写シ

二（朱）
○　問屋自分之定書

御若老衆之分
本荷・軽尻共ニ付出シも通り、次之駄賃請取候事
御目附衆之分
本荷・軽尻共ニ五割増之駄賃請取候事
但シ御目附方部類ハ何も同様ニ取計候事
右之外者、都而本荷・軽尻共ニ無差別、付出シ之分ハ本駄賃五割増請取候事
一鞍置馬茂軽尻之事
一荷物なしニ乗候とも軽尻之事

右者西之内横折江認申候書付、先役ゟ相廻リ候写シ

三（朱）
○　上包此通り
添触　江幡治郎右衛門
加藤三郎兵衛

覚

一御舟渡御先触　壱通
一人馬御先触　壱通
〆　弐通
但シ白木箱ニ入、墨付すれなし

右之通相送り申候間、刻付を以早々御順達可被成候、已上

水戸
加藤三郎兵衛

酉十二月十二日　江幡治郎右衛門印

長岡ゟ
千住迄
宿々
御問屋衆中

右者西之内横折江相認、上包紙を付、上包之裏ニ十一月十九日御用部屋ゟ御返し被成候と有之候

四

○(朱)

覚

一往還之駅馬就不足、以訴訟五拾疋増之馬金三百両拝借、壱人分人馬之代六両、自来酉三年無利上納仕筈候、従先規磯・湊・大貫・平磯・川又・長岡・石崎筋、所々之諸荷物御町之外横道附送事雖有御停止、近年猥有之条、延宝八申暦霜月廿四日於評定所、御奉行伊藤七内・忍穂三郎左衛門、御郡奉行衆江弥先規之通、御町之外横道荷物不可通旨被仰渡、其趣就被仰聞候、同廿六日御町年寄并問屋方江申渡候事

一天和三亥暦閏五月、石崎村自問屋方荷物枝川村江横道就附送候、押置之為証拠荷鞍取置、右之旨御郡奉行塀和庄兵衛方江相達候処、禁獄雖可申付、自分新役有之故、此度者宥免、以来於相背ハ屹度可処厳科之旨堅約之条、任其意候事

右之通令決定之条後来察此旨可検断者也

天和三亥　望月治衛門　印
閏五月廿一日　小湊喜左衛門　印

水戸御町
問屋

右者大奉書横折江認、御町奉行様御両印付天和三亥閏五月廿一日御渡シニ相成候御書付之写シ

五

○(朱)

覚

従羽州米沢領・奥州守山領・窪田(久保田)領、御年貢金銀江戸江差越候節、窪田長五郎断次第、不寄何時駄賃伝馬出之、泊々ニ而者其所之者致番、無滞様ニ急度可相届之候、以上

元禄八亥
十一月廿六日

諸伝左衛門　印
萩彦次郎　印
井志摩守　印
稲下野守　印
松美濃守　印

従羽州米沢領・奥州守山領・窪田領、江戸迄

右御証文之通拝見仕奉畏候、以上

右宿中

水戸城下

問屋次郎衛門　印

亥ノ

十二月八日

年寄

又右衛門　印

鋤柄又之進殿

右之通手形致候而相渡申候、為覚之如此写置、右西之内半たち書之通写シ置申候、尤此方ゟ之手形写シハ継紙ニ相成居申候事

六

○(朱)　道中荷物貫目之儀、先達而茂度々被　仰出茂有之所、御定之貫目ゟ重ク仕候儀不宜候、左様無之様ニ相心得可申候、尤支配之者共江茂可相達旨被　仰出候旨、今日於　御城御目附衆ゟ御達有之候事

丑六月十五日

右ハ白半切江留置候分相写シ置申候事

七

○(朱)

問屋

七兵衛

金衛門

下御町諸商人所々江商売物附出シ荷物并御領・他領之諸商人御町江参、諸色相調附出候荷物馬之儀ニ付、下御町諸商人共願申出候ニ付、別紙之通申付候間、御領・他領之諸商人自分馬牽(とキ)参り直ニ其馬ニ附参候節、又者御町無之最寄之戻り馬ヲやとひ附参候節、一駄ニ付駒之口銭弐拾四文宛其方共江相納候様ニと申付候間、帳面ニ記請取置可申候、尤毎年正月ゟ六月迄之分、七月より十一月迄之分、七月と極月始ニ右駒之口銭取納帳差出シ可申候割合可申付候、尤別紙ニ下御町中江申付之通、御町馬ヲ差置偽りを構え、御領・他領之諸商人自分馬ニ茂無之を自分馬之由申、又者最寄之戻り馬ニも無之を戻り馬之由申候様成儀有之候ハヽ、早々相断申出候様ニ馬指并馬持・馬方共江其方共ゟ茂具ニ可申付候、馬方共只今迄者間々ニ駒之口銭手前江取之候所、此度其方とも為取納候間、手前々の益無之と存候ものも可有之候哉、併其段ハ追而割合を以駒之口銭之内可為相渡候間、此段馬方共江も申含指置、前書之通偽ヲ相構候者在之候ハヽ、相断、早々申出候様ニ馬方共江可申付候、勿論当春以来之様成義不仕候様、其方共ゟも是又能々可申付候、其方共之儀只今迄無之儀ヲ取計太儀ニ者候得共、少々ハ益茂在之儀、第一御町中之為ニ候間、件之通精を出し取計可申者也

貞享二と見ル

丑十二月

右者延紙横折江認メ置候留之写ニ御座候事

八

○(朱)

覚

一往還之伝馬御証文者勿論、井坂与五太夫殿木札之御証文ニても、惣而御町ニ而次申伝馬之儀者、前方ゟ石町より出シ来り候所、此度井坂与五太夫江木札之証文之事ニ付、石町庄屋五兵衛方江伝馬出シ候様ニと申遣候得者、与五太夫殿木札之証文ニ而者馬出シ不申候筈之由、庄屋五兵衛方ゟ申越候ニ付、御役所江申出候得者、元禄十弐年卯ノ正月十九日御評定所ニ而被仰合候由ニ而大森伊衛門殿ゟ被仰渡候者、向後御町ニ而次申程之伝馬ハ石町ニ役馬拾九疋有之候間、石町庄屋方江申遣為出申様ニと被仰聞候、尤石町庄屋五兵衛方江も被仰渡候由、石町馬皆出払候由於申ニハ大廻り之伝馬出前ゟ定夫ニ申付出させ可申候、為以後之留置申もの也

元禄十弐年卯ノ正月十九日

右者白半切紙江留置候分相写シ置申候事

九

延享三年

俵名左之通手代紙立紙帳面綴なり

○(朱)

御巡見御用　一巻

寅八月

覚

一人足指引　七軒町　与左衛門
　　上金町　兵左衛門

一馬指引　裏三町目　八郎衛門
　　上金町　介左衛門

一御貸着物世話役　二町目　理三郎
　　伊左衛門

一雨覆世話役　七軒町　忠左衛門
　　本二町目　甚衛門

右御貸着物等先江附遣相渡先ゟ請取参候者

本壱町目
紋左衛門

一問屋前江敷候莚百枚御買物方ゟ請取可申事

一本五町目ニ同心罷有、誰殿荷物と申儀承り請取候問屋江遣候節、案内ニ附候ため、人足拾五人五町目江遣シ可申候

但シ、是ハ寄セ人足之内ゟ遣可申候

一万一夜ニ入候節之用心ニぼんぼり心掛ケ可申候、雇問屋にてハ、手前ニ而ぼんぼり才覚致候筈ニ有之候、ぼんぼり掛ハ会所ゟ貸可申候間、銀平・茂兵衛方江申遣請取可申候

覚

一人足三百五拾人

内百七拾五人　上御町
百七拾五人　下御町

右之内ニ而人足六拾人

内三拾人　上御町
三拾人　下御町

是ハ供廻り之内代りニ出候間、脇指を為指髪月額見苦敷無之様ニ可申付事

一人足拾人

内五人　上御町
五人　下御町

是ハ鑓持代りニ出候間、大小を為指月額為致可致事

右両様共ニ着類者御貸物相渡シ候事

一馬　上御町神先共ニ

一同三拾壱疋　下御町宝鏡院門前共ニ

一同八拾疋　郷村寄セ馬

六疋内三疋　上御町
三疋　下御町

是者鞍馬巡見衆并其外供廻り之内、乗候為ニ出候馬具六口、御厩ゟ郷村江廻ル

右人馬巡見衆三人江割

山口勘兵衛殿分　弐千五百石
上下四拾人程　本三町目金衛門方

一人足百拾七人

わけ拾人脇指さし　上御町ゟ

同　同断　下御町ゟ

弐人刀指　上御町ゟ

弐人同断　下御町ゟ

〆弐拾四人

残り九拾三人

四拾七人　上御町ゟ

四拾六人　下御町ゟ

一馬

内二疋鞍置　上下ゟ

残り

弐拾七疋　上御町ゟ
郷村寄馬

神保新五左衛門殿分　九百石
上下共七人程　本三町目雇問屋江

一人足百拾七人

わけ拾人脇指さし　上御町ゟ

同　同断　下御町ゟ

壱人刀指　上御町ゟ

弐人同断　下御町ゟ

〆弐拾三人

残り九拾四人

わけ四拾七人　上御町ゟ

四拾七人　下御町ゟ

一馬　　上下より
内弐疋鞍置
残り　　上御町ゟ
弐拾七疋　　郷村寄セ馬

細井金五郎殿分　千八百石
一人足百拾六人　上下三拾五人程
わけ　拾人脇指さし　　上御町ゟ
同　同断　　下御町ゟ
弐人刀指　　上御町ゟ
壱人同断　　下御町ゟ
〃弐拾三人
残り九拾三人
わけ　四拾六人　　上御町ゟ
四拾七人　　下御町ゟ

一馬
内弐疋くら置　　上下より
残りわけ　　下御町
弐拾六疋　　郷村寄馬

金衛門方
一馬拾六疋　　下御町
一同弐拾七疋　　郷分ゟ
一人足百拾七人

内弐拾人脇指さし
四人　刀さし
残り九拾三人

一馬拾六疋　　下町馬
一同弐拾七疋　　郷分馬
一人足百拾七人　　上下ゟ
内弐拾人脇指さし
四人　刀さし
残り九拾三人

御朱印之写
人足八人・馬拾五疋、従江戸奥陸(マヽ)・出羽并松前迄上下可出之、
是ハ右之国々為巡見山口勘兵衛被遣候、付而被下之者也
延享三年　　右宿中
三月十三日

御朱印之写
人足八人・馬拾疋、従江戸陸奥・出羽并松前迄上下可出之、是
ハ右之国々為巡見神保新五左衛門被遣、付而被下之者也
延享三年　　右宿中
三月十三日

人足八人・馬拾疋、従江戸陸奥・出羽并松前迄上下可出之、是
者右之国々為順見細井金五郎被遣、付而被下之者也
延享三年　　右宿中

三月十三日

覚

御朱印伝馬　拾五疋
内馬拾弐疋
内馬三疋代人足六人可被指出候
御朱印人足　八人
雇賃人足弐拾弐人
右者山口勘兵衛分
御朱印伝馬　拾疋
内馬九疋
馬壱疋代人足弐人可被指出候
御朱印人足　八人
雇賃人足三人
右者神保新五左衛門分
御朱印伝馬　拾五疋
馬拾疋
馬五疋代人足拾人可被指出候
御朱印人足　八人
右者細井金五郎分

覚

常陸国
八月十三日
大中村休　太田村泊り

八月十四日
枝川村休　長岡村泊り
同十五日
府中休　牛久泊り
下総国　武蔵国
同十六日
小金休　千住泊り

右之通候

右者山口勘兵衛・神保新五左衛門・細井金五郎巡見御用相仕舞、明十三日下関・河内発足ニ候、右之人馬無滞可被差出候御朱印之人馬并泊休付遣候、無相違御順達、千住泊おゐて御返シ可在之候、以上

山口勘兵衛内
牛嶋喜三五　印
西田重躬　印
神保新五左衛門内
上田伴衛門　印
竹中源左衛門印
細井金五郎内
原　安衛門　印
関口九兵衛　印

宿々

問屋中

山口勘兵衛内
牛嶋喜三五
神保新五左衛門内
上田伴衛門

上書

泊休村附

細井金五郎内
原　安衛門

覚

一御朱印御伝馬拾五疋
一同人足　八人
右者水戸ゟ長岡村迄二里八丁相勤申候
一御雇人足　五人代
一軽尻　壱疋代
右之通御公儀様ゟ定人足賃請取申候、其外人足・御伝馬出シ不申候、尤御三人様御悲分之儀無御座候、為後日仍而如件

差上申手形之事

一御朱印人足　八人
一御朱印伝馬　拾五疋
　内三疋、人足六人ニ替ル
一賃人足　弐拾八人
　此賃銭壱貫弐百弐拾四文
　但シ壱人ニ付四拾弐文
一軽尻　五疋
　此賃銭弐百八拾八文
　但シ壱疋ニ付五拾六文
〆壱貫五百拾六文　壱貫百四拾五文かへ
　金壱分ト三百六拾七文取
右者水戸ゟ長岡村迄道法弐里四丁之所、御公儀様御定之人馬相立申候、外ニ余慶之人馬出シ不申候、尤御定之賃銭慥ニ奉請取、御主人様御下々迄御悲分之儀少シも無御座候、為後日仍而如件

常州茨城郡水戸下町本三町目
問屋金衛門印
延享三年
寅八月十四日　馬指長左衛門印
牛嶋喜三五殿
西田重躬殿

私ニ覚

一御与力衆　柏麻衛門様手前江御出、岩間弥兵衛様御雇問屋六郎左衛門方江御出被成候、寺門喜太平様御会所江御詰、大貫幸介様御病気御出不被成候、六郎左衛門方江小林弥市、次郎衛門方江加藤新六、手前江塙茂次衛門被参候筈ニ御座候所、病気故不被参候、御与力衆・年寄衆袴羽織、両問屋・御雇問屋共ニ上下ニ而御目見得仕候、問屋前詰組衆中田幸八殿・長谷川太左衛門殿御両人也、尤此節吸物小附食ニ而平皿香物迄ニ御座候、酒も出シ申候
一寄高人足之内九人残り
一寄高馬之内五拾七疋残り
一駕籠　壱挺　本四町目　太郎衛門
一同　壱挺　溝井玄庵
一同　壱挺　檜物町　坂本玄周
一同　壱挺　伝次郎

是ハ御用ニ立不申候

覚

一鑑壱貫弐百廿四文　山口勘兵衛様分　賃人足弐拾八人
一同弐百六拾文　細井金五郎様分　同　六人
一同百三拾文　神保新五左衛門様分　同　三人
〆鑑壱貫六百拾八文
人足三百五拾人ニ割
但壱人ニ付四文四分四厘

一鑑弐百八拾八文　山口勘兵衛様分　軽尻五疋
一同弐百三拾弐文　細井金五郎様分　同　四疋
但壱疋五拾六文ツヽ、
〆鑑五百弐拾四文
但　郷村寄馬弐拾七疋ニ割
壱疋ニ付壱拾八文六分ツヽ、
右之通ニ御座候、以上
寅九月朔日
問屋　笹嶋金衛門
江川次郎衛門
御役所様

覚

一陸尺かんばん弐拾四人分　帯合羽共ニ
一御貸馬馬道具　三口
一家左(カ)江御貸馬馬道具　三口
一御貸駕籠　七挺　雨桐油共ニ
三挺ハ脂洩キふとん
四挺ハ嶋木綿ふとん敷
一かんばん三拾九人分帯共ニ
但シ御貸人着類ニ成ル
一荷覆桐油拾五枚
一因(カ)茅表　拾五枚
右七行此度奥州帰り巡見衆被通候御用之品、松岡(ママ)御郡江請取、太田・野々上・南御郡迄繰ものニ相用候所、先年奥州帰り巡見衆被通候節、御町次江も右御入之品くり物ニ相用候、留御郡方ニ者不相見候得共、於御役所ニ別段ニ御請取被成候而者、御入用も重々御役所御執計も御六ケ敷可有御座候義、旁くり物ニ致御町次江も相用、南御郡迄御用立可然存候ニ付、其趣伺出候所、弥其通御役所江可申合旨御用人衆ゟ被仰聞候間、前書七行之品、枝川村次所ゟ御町次所迄至着次第直ニ御用被成、長岡次所迄御送り被成候様ニと奉存候
一先年之通御貸人・御貸馬其外御朱印人馬并駄賃人馬共ニ枝川ゟ下町三町目迄指遣可申候間、諸人馬三町目ニ而為御次被成候様ニと奉存候
一巡見衆江陸尺廿四人・御貸人之義、松岡・太田・野々上・南御郡迄先年之振ヲ以御町人之もの通シ陸尺ニ相雇、此度も指

出申候、就夫日雇銭割之次第ハ、四郡通筋之道法江割物ニ致シ取立、尤御町之義も道法江割かけ、日雇銭取立相渡候振ニ先留相見得申候間、此度も右之振ニ御申合之上御取計可然奉存候、弥右之思召ニ候ハヽ、其趣雇陸尺之者共江茂可申付候、否御答被仰聞候様ニと奉存候

一巡見衆御朱印人馬之外、駄賃人馬之儀者、先年之振を以御定法之駄賃銭取候筈ニ窺之上相済申候、為御心得得御意候、以上

八月四日　　御用番　川又伝五兵衛

御町奉行様中

本四町目次郎衛門方

人足指引　本四町め　嘉兵衛
　　泉町　小左衛門

馬指引　本四町め　善蔵
　　泉町　八郎衛門

御貸着物セ話役　本四町め　善左衛門
　　下新町　長蔵

雨覆セ話役　肴町　吉郎衛門
　　本四町め　物兵衛

右御貸者等先へ附遣相渡シ候者　本弐町め　善衛門

本三町目雇問屋方　利左衛門屋敷にて五町め六郎左衛門罷出相勤ル

人足指引　曲尺手町　吉左衛門
　　下金町　半衛門

馬指引　本六町目　平兵衛
　　下金町　善五郎

御貸着物セ話役　田中町　半三郎
　　本五町目　庄兵衛

雨覆セ話役　曲尺手町　弥一兵衛
　　同町　吉兵衛

右御貸物等先へ附参相渡候者　本五町目　源蔵

案内之者

山口勘兵衛殿　七軒町　七衛門
　　肴町　与左衛門

神保新五左衛門殿　本弐町目　平八
　　下新町　伊左衛門

細井金五郎殿　　九町目 勘衛門
本三町目 長四郎

一問屋前ニ駕籠居候ハヽ、新筵敷其上可指置候、葉たはこ之心掛ケ可致給仕人可心掛、御町年寄方へ可手合
一御貸駕籠七挺郷村ゟ相廻り候筈

覚

駒口五拾四文引残
一鐚四百六拾六文　　軽尻九疋分

わけ

拾弐疋　上圷村馬勤
弐　疋　上泉村馬勤
五　疋　大橋村馬勤
八　疋　下圷村馬勤

右者先月十四日御巡見御通りニ付、問屋前ゟ馬岡村(長カ)迄相勤申候賃銭ニ御座候、右之村々江御割渡被下候様ニ奉願上候、以上

九月　　問屋 江川次郎衛門
同 笹嶋金衛門

福田林平様
御役所
御手代様中

一〇(朱)

覚

一歩行夫四人
一長持壱棹
一から尻四駄
此度日光御山江
水戸殿為名代大森次郎左衛門当十三日致発足候、道中人馬無遅滞可被指出候、尤所ニ寄り過人馬入用之節、是又滞不申候様ニ可被指出候、以上

宝暦四年戌正月四日　　大森次郎左衛門内 小田倉兵馬

下町 問屋衆　飯富　八本　小勝
茂木泊り　市塙　祖母井　道場宿
宇都宮　中徳次郎泊り　大澤　今市

右之所々　問屋中

一一(朱)

覚

一人足拾三人　内八人清厳寺江遣シ
残り人足五人
一伝馬壱拾五疋　内五疋同所江出シ　穀町ゟ
残り伝馬拾疋
一魚ろうそく　五挺

是ハ夜ニ入御荷物参り候ニ付、問屋前ぼんぼり弐ツ立灯し申候

右者向山御寺請取申候僧衆江出シ、枝川村迄相勤申候人馬書付差上申候、以上

宝暦三酉十二月廿六日　　笹嶋金衛門

御役所様

覚

西十二月廿七日分
一人足百弐拾五人　　上御町
一同　百弐拾五人　　下御町
〆人足　弐百五拾人
わけ
弐百弐拾人　　勤人足
三拾人　　残り人足
一伝馬五拾疋　　上御町
一同　五拾疋　　下御町
内弐拾六疋　両穀町
弐拾四疋　大廻り分
〆伝馬百疋
わけ
七拾疋　　勤馬
弐疋　　上町江遣シ
弐拾八疋　　残り馬

同廿八日分
一人足四人
一伝馬四疋　　穀町分

右者向山御荷物、問屋前分小霧村迄相勤申候人馬書付差上申候、以上

酉十二月廿八日　　問屋笹嶋金衛門

御役所様

一二

(朱)○　常福寺様御役者衆中様　　府中問屋清衛門

一書状壱通

右者額田常福寺様御役者衆中様迄無拠用事ニ付指遣申候、乍御世話宿継ニ而御達可被下候、尤旧冬御寺請取之衆中様江駕籠御用立候所、只今ニ御返シ不被下候、依而書状差上申候、右之駕籠近日継送参候ハヽ、是又乍御世話近々着仕候様奉頼上候、若又先達而向山分御出シ道中ニ相滞も御座候ハヽ、早々御継送り可被下候、右之趣宜敷御取計奉頼上候、以上

戌正月八日　　府中問屋清衛門印

一三

(朱)○　覚

一此駕籠府中問屋清衛門方迄乍世話宿々間違無之様御届ケ可被下候、尤鳥目五百文相添候、不足ニ候ハヽ、府中問屋ニ而取

替可被下候、以上

戌　　向山

正月十四日　　納所

宿々問屋衆中

賃銭三百弐拾八文枝川ゟ請取、内八拾四文・人足弐人分引、残り弐百三拾九文長岡江遣ス、内壱文不足

新町詰夫次郎兵衛遣ス
権六

天気上り次第常福寺様御荷物其御村へ参候間、左様御心得可被成候、御心得之ため如此ニ申上候、已上

戌　　上吉影村

正月十九日　　庄屋又衛門

小霸村御庄屋様

別紙之通常福寺様御荷物天気上り次第ニ参候由申来り候、人馬御心懸被成候様ニと奉存候、取込早々申上候、以上

戌　　小霸村庄屋

正月廿日　　甚兵衛

尚々二日者雨天故参申間敷候

水戸

御月番御問屋様

覚

馬八拾五疋

人足百五拾人

わけ　馬四拾三疋　　下町

同四拾弐疋　　上町

人足七拾五人　　下町

同　七拾五人　　上町

右明廿一日朝五ツ時、本三町目問屋前江相詰候事

但天気上り不申雨天ニ候ハヽ、無用ニ候、廿二日ニ而も三日ニ而も雨さへふり不申候ハヽ、其節可指出候

覚

一御荷物百四拾八固り

右者向山常福寺様御荷物御改御請取、右之村々無間違御届ケ可被下候、以上

戌正月廿一日　　仁平茂兵衛

外ニ弐固りわけ荷

右御村　　裏ニ小川村役人

御役人衆中様　　問屋茂兵衛

向山江之書状ニ

常福寺様

御役僧様

裏ニ正月廿一日出　　本六町め伝二郎内

荷物帳面入　　佐平ニ遣ス

覚

廿一日昼 一伝馬四拾弐疋　上御町
一同　弐拾六疋　両穀町
一同　拾七疋　大廻り
一同夜　弐拾六疋　両穀町
一同　拾七疋　大廻り
廿二日 一同　壱疋　穀町

戌正月廿四日

巳上刻ニ出ス、前々分之書付也

廿二日昼 一伝馬四拾三疋　大廻り
廿三日昼 一同　壱疋　穀町

〆伝馬百七拾弐疋
わけ 七拾壱疋　勤馬
百壱疋　残り馬

廿一日昼 一人足七拾五人　上御町
一同　七拾五人　下御町
一同夜　七拾五人　下御町
廿二日昼 一同　六拾人　上御町

〆人足弐百八拾五人
わけ 六拾壱人　勤人足
弐百廿四人　残り人足

弐拾目かけ 一魚ろうそく　弐拾五挺

右者夜中御荷物参候ニ付、問屋前ぼんぼり弐ッ相立、其外荷物請取申候場所等ニ而とぼし申候

右者向山御荷物問屋前ゟ枝川迄相勤申候人馬書付指上申候、以上

戌正月廿三日　問屋 笹嶋金衛門 加藤勘左衛門

御役所様

一此度水戸常福寺来ル廿七日江戸発足

同日　新宿昼休　同日小金泊り
廿八日藤代昼休　同日土浦泊り
廿九日片倉昼休　同日長岡泊り
晦日　向山着

右之通ニ候間、本馬八疋・軽尻三疋・人足拾六人宿々無間違出候様頼入申候、以上

千住ゟ片倉迄　水戸常福寺
宿々問屋中　納所

右御触御座候間、馬拾五疋程・人足弐拾人程御申付、無間違御待被成候

一四

(朱)○　享保十六年亥正月ゟ同十八丑三月迄

一鐚二十五貫五百壱拾六文　駒口納銭　笹嶋金衛門分

右当戌ゟ弐拾五ケ年賦

但

戌ゟ酉迄弐拾四年者　壱貫弐拾文ツヽ納

戌壱年者　壱貫壱拾六文納

右之通当暮ゟ年々可相納候事

閏二月

右者閏二月廿五日次郎衛門・勘左衛門・長四郎・吉左衛門・伝五衛門・金兵衛・平八病気ニ付、組頭一郎衛門出て作十郎殿宅ニ而又衛門殿・太郎衛門殿も被出、年賦ニ被仰渡、寄合之御願名主衆共ニ不残御頭様弐ケ所・四ケ所之御与力衆・年寄衆三ケ所、右名主中江も次郎衛門一同御礼ニ罷出候

一五

(朱)○　享保十六亥正月ゟ同十八丑三月迄

一鐚弐拾六貫弐百三文　駒口納銭　江川次郎衛門

右当戌ゟ弐拾五ケ年賦

但シ戌ゟ酉迄弐拾四年者　壱貫四拾八文宛

戌壱ケ年者　壱貫三文納

享保十六亥正月ゟ同十八丑三月迄

一鐚弐拾五貫五百拾六文　駒口納銭残　笹嶋金衛門

右当戌ゟ弐拾五ケ年賦

但シ戌ゟ酉迄弐拾四ケ年者　壱貫弐拾文宛

戌壱ケ年者　壱貫拾六文納

右之鐚高先達而上納可仕之所、委細隣町之名主并加藤勘左衛門願書指上申上候通、困窮ニ付及延引申候処、御慈悲之御了簡を以前書之通、当戌年ゟ戌年迄弐拾五ケ年賦ニ被　仰付難有仕合ニ奉存候、上納之儀者前書之通、年々無相違屹ト上納可仕候、尤永年賦之儀ニ御座候ニ付、上納可仕心当仕置、世忰共江も申附、少シ茂無滞上納可仕候、依之世忰共判形ニ而証文如斯ニ御座候、依而如件

江川治郎衛門印

同人世忰　同　与八印

宝暦四年

戌三月

笹嶋金衛門印

同人世忰　同　長十郎印

御町御年寄衆

一六
○(朱)　享保十三年申五月廿八日ニ者、松平陸奥守様御通被成候、御家中者御町通ニ御座候而、其夜者添村御泊りニ御座候ニ付、御用多ク御座候而度々罷出申候、其節者両　御頭様方ニも西御会所江御詰被遊候而被成御座候ニ付、御会所江計罷出申候節、白須甚兵衛様・石川久助様ゟ被　仰付候者、ケ様之節者勿論平生たり共供之者召連候節ハ、供之者ニ脇指為帯可申候、其方共之義者日々他所之衆ニも付合申候事ニ御座候間、不苦敷候由被仰付候

右之通先金衛門覚書ニ相見江申候

右者宝暦四戌五月五日ニ我等供之者ニ脇指為帯候ニ付、同十三日岩田太郎衛門殿江大貫幸介様何時頃ゟ歟、両問屋供之者ニ脇指御免之わけ内々ニ而承り可申由被仰候由ニ付、先金衛門留書相写シ内々ニ而太郎衛門殿江見セ申候、尤此節宗十郎殿同役我等近キ好身ニ付、太郎衛門殿方江御内意御座候由ニ太郎衛門殿被申候、太郎衛門殿ニ茂私用ニ而罷出候節、幸介様御咄シ御座候由ニ太郎衛門殿御咄御座候

一七
○(朱)　宝暦四戌九月文通之写シ

以飛札啓上仕候、然者去秋中以手紙得御意申候、其御地ゟ江戸表江出申候肴荷物之儀、此間も度々ニ至り長岡ニ而御町馬方ども見付申候、此上御城下問屋前江相掛不申横道仕候ハヽ、荷鞍相押御役所様江御訴申候条、屹ト被仰付可被下候、尤右之段長岡村両問屋中江も申遣シ置候事ニ御座候間、左様ニ思召可被下候、以上

九月廿三日

追啓、各々様御堅勝ニ相勤仕被成候半与奉珍重候、且西場筋江罷通り申候荷物茂夜中抔無沙汰直通り仕候、是又屹ト被仰付可被下候、以上

磯浜御庄屋
人見紋左衛門様　　水戸問屋
笹嶋金衛門
磯崎孫市様　　同
加藤勧左衛門
添江も此文言ニ而遣ス　　庄衛門
当人足
中添御庄屋
中川六左衛門様
磯崎長十郎様
小泉江も右同断
小泉村御庄屋
飛田源十郎様　　但廿五日手前人ニ而遣ス

一八
○(朱)　安藤勝蔵様御賄方

此御両人様四日ニ御下りニ付、金百疋被下候　　広井半太夫殿
但御当所ニ問屋衆何人御座候哉も不案内ニ付、　　嶋田庄太夫殿
旁右之様子承度由被仰付候ニ付、前々

河内守様・備後守様ゟ被下置候わけ申立候処、書付ニ被成御持参被成候、両問屋江金弐百疋ッヽ、馬指両人江弐百疋、定使江鳥目壱貫文ッヽ、四人之者共江被下候と申立候、尤此趣御月番幸介様へ七日ニ申上り也

宝暦六年子九月七日

一九

○(朱) 書付を以申進候、然者此病人藤代近所三王村之者ニ御座候所、奥参りニ参候処、当所ニ而大病相煩あご(カ)ニ而遣申候、尤銭遣イ切無御座候ニ付、宿着次第賃銭之儀当地江差向遣候筈ニ旁申合候間、早々御送り可被成候、賃銭早速此方ゟ帳面を入相送り可申候間、宿々御引取被成候様可被成候、以上

七月十一日　水戸問屋

長岡ゟ　笹嶋金衛門印

同　加藤勘左衛門

藤代迄

宿々問屋衆

駿河台御屋敷四百三拾石

鈴木忠左衛門様御知行下定衛門親病人

宝暦七年丑七月十一日

二〇

○(朱) 江戸伝馬町問屋

馬込勘解由

吉沢主水

高野新衛門

小宮善衛門

宝暦十年辰正月御用留ゟ写シ

二一

○(朱) 宝暦十一年巳三月御用留ゟ写シ

先達而御相談申候駒口銭家々方江請取置、此度之馬金拝借、馬揃次第馬持共江相渡候様被仰付候、此段下筋御仲广中江御達可被成候、以上

三月廿一日

尚々片荷ゟ壱駄迄者弐拾四文宛、片荷ニ足り不申候ハ見済ニ致候間、荷物出シ申候節、月番問屋前迄駒口銭持参致シ札請取、右之札馬方江相渡荷物出候様御達可被成候、以上

馬金拝借人之儀ニ付、三月十四日十一支配名主金衛門宅江寄合、尤同役被参、弐拾疋之内御町ニ拝借人四人、但台町吉左衛門・裏壱町め武介・裏弐町目仁兵衛・裏四町目長蔵〆四疋、残り拾六疋を惣名主ニ而壱疋ッヽ、拾壱疋請合、残り五疋ヲ鬮ニ致シ、当り人数七軒町九兵衛・本三町目喜兵衛・本四町目伝六・本五町目庄兵衛・下新町長衛門鬮七ッ出シ候所、本四町め太兵衛・

曲尺手町弥市兵衛除り申候、尤惣名主相談之上ニ而取計申候、
本三町め名主・本四町目名主病気之由、組頭孫衛門出ル、八町
め名主病気、組頭与惣衛門出ル、其外ハ不残直ニ出申候

二二
○(朱)　下総国
本朝鎮守棟梁
　香取太神宮
於御神前国家安全五穀成就御祈祷令執行所也
依定式烏帽子着装(カカ)速帰村巡行令免許者也
　宝暦十一辛巳正月
　　大宮司大中臣朝臣印
　　篠塚掃部組印
　　御師　宮崎数馬

御公儀御法度之趣急度相守可申事
一御関所宜御断申上可被通事
一奉権神威非儀・非礼之働仕間敷候
一喧嘩・口論・博奕・諸勝負急度可相守事
一帰村巡行之節ハ於所々其里長ニ相断巡行可致事
一此者何連ニ而茂壱人宿御借可被下候事
右之者当社ゟ差出シ候処、相違無之候、以上
　長岡ゟ千住迄軽尻駄賃并道法り

一四拾八文長岡ゟ小幡迄　一里卅壱町問屋銀七・新五左衛門
一弐拾八文小幡ゟ片倉迄　一里五町問屋兵蔵
一三拾壱文片倉ゟ竹原迄　一里八町問屋久四郎
一三拾弐文竹原ゟ府中迄　一里九町問屋弥三郎
一四拾七文府中ゟ稲吉迄　一里卅町　問屋藤四郎
一五拾弐文稲吉ゟ土浦迄　二里　問屋宗兵衛
一弐拾六文土浦ゟ中村迄　一里　問屋甚左衛門
一七拾八文中村ゟ牛久迄　三里　問屋作衛門
一弐拾六文牛久ゟ若芝迄　一里　問屋七郎治
　是迄常陸国なり
一弐拾六文若芝ゟ藤代迄　一里　問屋甚五兵衛
一四拾八文藤代ゟ取手迄　二里　問屋六郎兵衛
一三拾弐文取手ゟ我孫子迄一里半　問屋武衛門
一六拾八文我孫子ゟ小金迄二里廿八丁問屋平左衛門
一四拾三文小金ゟ松戸迄　一里廿八丁問屋甚八
一四拾文松戸ゟ新宿迄　問屋庄蔵
一三拾六文新宿ゟ千住迄　問屋庄左衛門

二三
○(朱)　宝暦十一年巳四月四日御評定所ニ而馬金御裏御判相済、
尤両問屋御合力籾御手形も一同相済、同五日ニ御金方桜井庄蔵
様江又三郎歩夫壱人召連、御金百六拾両請取、上田作十郎殿江
相渡置、尤右之段御月番寺門喜太平様江も申上ル、但御用人様・

佐野孫兵衛様・渡辺作衛門様、御裏御判ハ小山小四郎様・小笠原五兵衛様御合力御手形江者御用人様計也、右御金同十日上田作十郎殿宅ニ而惣名主衆其外之拝借人江相渡シ、面附帳同十一日早朝喜太平様江納ル

二四
(朱)○

駒口銭割覚

一鐚弐貫五百七拾弐文　三月廿日ゟ同卅日迄、又者四月十六日より同廿九日迄五町目ニ而取立候分
一同壱貫弐百四拾八文　四月朔日ゟ同十五日迄、又者五月朔日ゟ同九日迄金衛門取立候分
二口〆三貫八百弐拾四文
内五拾弐文　両問屋紙代
三百拾八文　両人馬指駒口ニ引
落合長四郎・五郎衛門両名主印形

差引
残り三貫四百五拾文
此鐚弐拾三人ニ割
馬持壱人ニ付百四拾八文宛　〆六拾枚
内拾枚残ル

一百四拾八文　台町善蔵　一百四拾八文　江戸町源十
一百四拾八文　江戸町藤七　一百四拾八文　同町十五郎
一百四拾八文　裏二町め清衛門　一百四拾八文　裏二町め仁兵衛
一百四拾八文　檜物町伝治郎　一百四拾八文　本三町目惣七
一百四拾八文　本三町め孫衛門　一百四拾八文　本五町目清五郎
一百四拾八文　肴町伊八　一百四拾八文　田中町伝之丞
一百四拾八文　紙町吉平　一百四拾八文　裏六町め権介
一百四拾八文　本六町め藤十　一百四拾八文　本六町目伝左衛門
一百四拾八文　下新町三衛門　一百四拾八文　吉沼庄蔵
一百四拾八文　大和田小衛門　一百四拾八文　本六町め伝五衛門代長左衛門
但台町武次衛門代判
一百四拾八文　田中町政衛門　一百四拾八文　裏七町目伝介
一百四拾八文　高野惣次郎

右駒口銭相止申候段、五月九日被　仰付候ニ付、惣名主江廻状差出シ惣馬持印形取、同十一日ニ御月番大貫幸介様江差出シ申候、尤馬雇候儀も前々之通直取ニ被仰付候

前書ニ
右之通駒口銭相渡銘々印形取差上申候、以上

宝暦十一年　問屋笹嶋金衛門
巳　同加藤三郎平
五月

御役所様

二五
○(朱)御飛札承知仕候、然者生物荷物之儀ニ付御申被越候所、此方商人共銘々可申付候得共、商ニ罷出申候而他行仕候者も御座候、居り合申候者江ハ右之段申付候所、未タ江戸表江者送り不申候由ニ御座候、此上又々可申付候間、左様ニ思召可被下候

九月廿六日　人見紋左衛門
笹嶋金衛門様　磯崎孫市
加藤勘左衛門様

追而申上候、弥御堅勝被成御座候由奉珍重候、追而得御意可申上候、右者当八年以前磯添江手紙遣候、返書同役方ニ而入用之由五月廿六日又三郎使ニ而遣ス、尤文言写置申候

御札致拝見候、如仰時分柄甚寒ニ御座候得共、弥御堅勝ニ被成御座珍重奉存候、然者当浜ゟ所々江諸荷物附出シ申候処、古来ゟ御城下通ニ而各御問屋前江牽かけ馬次いたし庭銭相払可申御定法ニ有之候間、已後西場筋江遣申候諸荷物各様前ニ而馬次いたし、庭銭をも被相払候様ニ可申付旨、御紙面之趣致承知候、乍去近年我々覚候而者、被仰聞候通、当所馬ニ而先々江附申候事ニ御座候得ハ、何そ相障り候儀も御座候而御願等ニ而も仕、只今之通附通シ候哉、御定法と被仰下候間、御書付之通支配之者共江も可申付候得共、此合当所之者江も承合近日御答可仕候間、此間附出申候荷物も御座候ハヽ、御答仕候内先御通シ可被下候、尤御役所様ゟ各様江被仰付候御事御座候得共、旁早速御答可仕儀御座候得共、右之通ニ御座候間、左様御心得宜敷様ニ御執計可被下候折節、御収納御用ニ取掛り罷在候故、早々及御答候、已上

十二月七日　菊地伝五衛門
笹嶋金衛門様　関根与一衛門
江川次郎衛門様
御報

五月廿七日
右親代之磯ゟ参候返事、御役所様江差上申候間、写シ置

宝暦十一年巳五月

二六
○(朱)奥州御巡見御帰り之
節御案内其外指引人之覚
主人江御案内六人

一　曲尺手町名主　高野惣治郎
下新町同　伊左衛門

二　しほ町名主　吉左衛門
本三町目同　五郎衛門

三

七軒町名主 与左衛門
本五町目同 清蔵

問屋前人足指引六人

七軒町組頭 七衛門
上金町組頭 六左衛門
本六町目同 平兵衛
上金町同 儀兵衛
白銀町同 平八
馬口労町同 市郎衛門

右者羽織袴ニ而股立取脇指帯

同下番四人

本七町目名主 武左衛門
藤柄町同 喜十郎
泉町名主 八郎衛門
上金町同 兵十郎

同馬指引六人

本四町目 善左衛門
向井町組頭 太郎治
本四町目 太兵衛
泉町組頭 六衛門
裏四町め組頭 太兵衛
泉町同 六太郎

用達江同三人

本七町目組頭 太郎兵衛ニ成ル
本壱町目組頭 吉郎兵衛代り

同下番四人

七軒町 吉兵衛ニ成ル
本七町目組頭 太郎兵衛
紺屋町 伝兵衛
肴町組頭 吉郎衛門
曲尺手町組頭 吉左衛門
本五町目 庄兵衛
八町目組頭 与惣衛門

同御貸シ着物世話役六人

カミ町組頭 藤四郎
本壱町目 市衛門代り
本壱町目 藤兵衛ニ成ル

右下番并諸事指引役々替り共心掛候

七軒町 市郎平
カミ町 伝兵衛代り
田中町組頭 惣衛門
本七町目 市郎兵衛

カミ町 治郎平ニ成ル

是ハ郷村ゟ参候を請取雇人足江為着長岡村江遣ス

同雨覆桐油茅表世話役六人

曲尺手町 弥市兵衛
同町 吉兵衛
九町目組頭 権左衛門
本七町目 清衛門
裏七町め組頭 介左衛門
裏五町目 善衛門

右取計同断

右之両品長岡村江為持参候而、村役人江渡、先ゟ請取ヲ取候而参候役三人

本弐町目 茂兵衛
八町目 勘兵衛

本五町目 伝兵衛ニ成ル

一三町目ゟ四町目迄之内ニ而問屋場三ヶ所

問屋 笹嶋金衛門 自宅
本四町目 井筒屋伝六 自宅

本五町目 小兵衛代り

是ハ問屋加藤三郎兵衛出張

本四町目雇問屋 岩田孫太郎 自宅

一上田作十郎宅ハ人馬次之内万一被休候ため心掛、在宿麻上下ニ而罷出候筈、葉たばこ盆心掛、給仕子三人羽織袴にて相詰メル、御町医茂内外共為詰候

一会所江も給仕子三人麻上下ニ而詰ル、菓子出候小角揚枝縁高等も心掛置候事

一三軒之問屋江御町年寄壱人ツヽ羽織袴ニ而相詰候

但御役所ゟ御壱人・同心中弐人ツヽ

一問屋所ニ而も若座敷江上り休ミ被申候ハヽ、葉たばこ出候心掛可仕候、給仕人店若者壱人ツヽ羽織袴ニ而心掛ケ置可申候、若駕籠之内ニ而休ミ被申候ハヽ、新キ筵敷駕籠を置可申候

一夜ニ入候ハヽ、ぼんぼり一張ツヽ立可申候、雇問屋ニ而者手前ぼんぼり心掛ケ可申候、ぼんぼり立ハ会所ゟ出シ可申候

一問屋前敷筵ハ上ゟ御渡し
一問屋場ニ幕(カ)釣り可申候
但シしぼり上ケ可置候
一問屋者麻上下着
右之通兼而御心掛可被成候、尤支配々ゟ罷出候面々江も間違等無御座候様能々御申付可被成候、以上

岩田太郎衛門
加藤又衛門
上田作十郎

六月十五日

右御書付惣名主江相廻り十七日ニ箱入ニ而参り候を写シ取、同日同役方江遣申候、尤問屋ニ而も被写可然由上田氏ゟ参候

宝暦十一年巳六月十七日御用留より写シ申候

二七
○(朱)宝暦十一巳七月四日本壱町目紙屋理兵衛方ゟ紙・御座・ぼんぼり〆壱駄大場商人之由、手前馬連参候而附出候を御町馬方共見付、駒口払候様ニと申候所、江戸町藤七馬方ニ相払候由右理兵衛方ゟ大場馬方江申遣候所、藤七馬方駄賃ニ罷出当主ニ在之候間、兎角荷物押可申候由御町馬方共申候ヲ、問屋前近所之者共立合先荷物遣申候、依之理兵衛方ゟ、間違之段同町橋屋清九郎侘ニ両度迄参候間相済、駒口銭弐拾四文・馬指又三郎ニとらせ申候

二八
○(朱)磯浜・湊・大貫ゟ江戸江為登候生肴之分、長岡村江直出シに相達候所、諸肴荷物共ニ長岡村江直出シに相済候様、尤他所出魚荷物之内磯浜・大貫・湊・平磯之儀者西場・完(マヽ)戸・笠間・烏山・太田原・宇都宮・佐野・結城・下館辺江指出候魚荷之分者是又只今迄之通下町江相懸ケ、松岡浜々之儀者只今迄之通相済候段御町奉行江達之事
右之通御書付八月廿九日御若老衆ゟ御渡候事
如斯ニ候得共松岡浜々之儀不相分候付、達延置候、此段其筋伺合之上又々追而可相達候得共、先右之段達置候
宝暦十一年巳九月中御用留ゟ写ス

二九
○(朱)覚
一金三分・本鐚九百九拾六文
此延鐚壱貫百九拾五文
此道法弐里八町
右者延享三寅年奥州帰り御巡見衆駕籠舁日雇銭、徳田町ゟ片倉迄道法十七里十四町江御割付、御町方分出辻取立相納申候
辰十二月
加藤六郎左衛門
三橋半六様
笹嶋金衛門
御役所様

宝暦十一年巳十二月中之御用留ゟ写ス

三〇
〇(朱)

覚

一人足　六拾人
一駕人　四挺分
一馬　拾弐疋
但面々払
此外自分乗茂可有之候

右者大学頭殿就逝去遺骸水戸瑞龍山江葬送ニ付、明後十六日酉ノ刻江戸発足、四日道中人無相違指出候様ニ可申付候、已上

十一月十四日　　川崎半左衛門
松平式部太輔殿内
千住ゟ
太田迄　　宿々問屋中

合印之儀者宿割之者持参可申候

右御先触宝暦十三年未十一月十六日夕九ツ半時参ル、枝川へ送り遣ス

覚

一燈灯持　弐拾四人
内四人御家中
一長持三棹　四人持
内壱棹御家中
一笠籠四荷　壱人持
内三荷御家中
一竹馬　弐人
一雨(カ)掛　弐人
一次夫　拾四人程
一御家中駕籠人
其外存(待)人
一挟箱　壱ッ
一馬　九疋程
一継夫　四拾人程

右者此度大学頭様御逝去被遊御尊骸水戸瑞竜山江御葬送ニ付、昨十五日御屋敷召上相伺候所、人馬御入用高前書之通被仰渡候、依之宿々人馬無滞御指出候様ニ御心懸可被成候、以上

十一月十六日　　千住問屋
宿々問屋中
年寄　　庄蔵

覚

一人足　八人
一馬　四疋
一長持　壱棹

右者十六日主仁儀　大学頭様御遺骸為御見送江戸表出立申候、

依人馬等無滞指出可被申候、以上

佐藤八衛門内
山部甚衛門

十一月十五日

千住ゟ長岡・額田迄
問屋衆中

三一
○(朱)一都而浜々ゟ江戸江為登候諸肴荷之義者、順道往来致候儀勝手次第ニ候、乍去商人勝手を以　御城下相廻候節ハ、御町之外横道為致間敷候

一西筋江出候諸肴荷之儀者、大貫・磯・湊・平磯右四ケ所ニ限り是迄之通下町江相懸ケ可申候、村松ゟ北浜々ゟ出候分者順路往来勝手次第ニ候

右之通り未十二月五日御役所様ゟ被　仰付候

宝暦十三年未十二月五日孫太郎月番ニ候所、相勝レ不申候ニ付、三郎兵衛罷出御書付を以被仰付候、以上

三二
○(朱)　口上覚

一此度問屋役被為　仰付難有仕合ニ奉存候得共、月番等茂早速相勤申上度奉存候所、家作り等之儀売買一通ニ相作り申候得者、往来諸荷物相送り申候場所も無御座、殊ニ詰人足等指置候ニも手支難義仕申候ニ付、岩田孫太郎役場跡借用仕往来御用相勤申上度奉存候ニ付、右之段奉窺上候、以上

申ノ閏十二月　江幡次郎衛門印
御町御役所様

右之通窺書同役加藤三郎兵衛相頼、十六日ニ差出候所十七日ニ相済申候、依而御礼ニ御町奉行様迄罷出候

一月番閏十二月十八日ゟ相勤申候、尤役場世話人長倉屋孫衛門相頼申候

一右孫太郎役場跡屋賃一ケ年金六両ニ借用申候、孫衛門方江当年祝義ニ金弐分遣候筈、来年ゟ壱ケ年ゟ金弐分宛遣候筈ニ溝江昌慶左之世話ニ而相極申候

明和元申十二月御用留ゟ写シ申候事

三三
○(朱)　御用留書付引渡覚

天和三亥十一月
一御条目　三枚
一同御証文　壱枚
一堅帳　三冊
一横綴帳　拾冊
一竪紙　三拾八本
一半切書付　六拾三通
〆百拾八色

右之通岩田太郎衛門方ゟ同役加藤三郎兵衛方江相送り、三郎兵衛方ゟ請取申候、以上

明和元年申閏十二月十二日

大西杢衛門
山本政次

三四
(朱)○

覚

一御証文写　壱通
一御休泊り附　壱通
〆弐通白木箱ニ入

右者神保備前守様　為　上使明二日明七ツ江戸御出立被成候付、右之通御渡被成候間、則指越申候人馬用意可有之候、尤道中無滞様ニ可被相触候、以上

江戸大伝馬町
高野新衛門

酉正月朔日
従千住ゟ水戸迄
宿々問屋中

一継人足　五拾人
外ニ夜中者丁ちん持廿五人
一本馬賃馬　五疋
一軽尻　廿五疋

右之通千住ゟ水戸迄人馬無遅滞可被指出候、以上

酉正月二日
宿々問屋中

一継人足　六人
一軽尻　壱疋

右之通従千住水戸迄無遅滞可被指出候、以上

大西杢衛門
山本政次

酉正月二日
宿々問屋中

此分神筆ニ写シ可申筈候所、落シ候間跡江留置申候

此箱二荷御樽壱荷江戸ゟ常陸国水戸迄急度持可被参者也

周防印

申閏十二月廿九日

右宿々

右四通御役所石川久助様へ指出申候

右之通長岡村ゟ参候間請取申候

覚

一御証文写　壱通
一高野新衛門添触　壱通
一大西杢衛門様
一山本政次様ゟ　御先触弐通

右慥ニ請取申候

正月三日　　長岡村江請取遣ス

今朝参候御証文写并大西杢衛門様・山本政次様ゟ御先触レ弐通・高野新衛門添触指遣候所、寅年御在国之節ハ御間違イニ而御請取被成候間、此度者長岡村江先例之通御取計候様ニ申遣候様ニと御達御座候間、左之通申遣候

以書付申上候、然者今朝御継送り被遣候御証文写并御先触・添触共ニ致一覧承知仕候間、其御村迄指戻シ申候条、段々宿継ニ而御納被成可然と奉存候、依而左之通

御証文写　　壱通

御箱ニ入

大西杢衛門様

山本政次様

御先触弐通

右之通指遣申候間、御請取可被成候、以上

正月三日　　江幡次郎衛門

長岡村　　加藤三郎兵衛

御問屋衆

追啓添触之内御証文写壱通・御休泊り付壱通と有之候処、御休泊り付ハ此方江参り不申候間、右請取ヲハ今朝も相除キ申候、委細御披見可被下候事と奉存候

追触

一賃伝馬　拾弐疋

一賃人足　拾五人

外ニ夜中丁ちん持拾四人

右者神保備前守様水戸江為　上使只今江戸御出立被成候間、宿々人馬用意可有之候、尤道中無滞様ニ可被相触候、以上

江戸大伝馬町

酉正月二日　　高野新衛門

従千住ゟ水戸迄

宿々問屋中

右之先触も長岡江相送り遣申候、以上

酉正月四日

右上使五日朝五ッ時御着、御出立八ッ過、右御出立ニ付人馬御地走ニ差出申候処、意味書遣呉候様ニ人馬役人衆被申候間、御役所江手合左之通両人印形ニ而遣申候

覚

一人馬之儀何程ニ而も御入用次第御地走ニ差出申候間、賃銭被下置候ニ及不申候、以上

酉正月五日　　問屋　加藤三郎兵衛

同　江幡次郎衛門

桑原五郎衛門様

右五町目月番之内如此ニ候

正月十六日ゟ我等月番

三五
○(朱)　覚

一人足　八人程
一馬　四疋程
右者
松平雅楽頭様御使者只今此許御出立被成、上町通ニて其御村ゟ長岡村江御出被成候間、人馬御出シ置御継可被成候、以上
正月十九日　江幡次郎衛門判
但シ問屋場判
千波村
御庄屋衆

三六
○(朱)　御朱印

人足八人・馬五疋従江戸常陸国水戸迄上下可出之、是者為御使筑紫宇兵衛被指遣付而被下者也
明和二年酉二月廿八日

覚

一御朱印人足八人
一御朱印伝馬五疋
一賃人足　六人
一賃馬　弐疋
但　駕籠弐挺　六人
合羽籠三荷　三人
竹馬弐荷　弐人
右者筑紫宇兵衛水戸為御使令発足候人馬之儀、無滞様ニ先々江御申達可有之候
一御朱印之写茂指越候、宿々為心得泊書付遣候
一此外賃伝馬并人足共ニ宿々ニ而申付候事茂可有之候間、其心得可給候、是又無滞様ニ可申通(達カ)候、触符留りゟ　水戸宇兵衛旅宿江可被相返候、已上
筑紫宇兵衛内
加藤十介
高山端衛門

二月廿八日
江戸より
水戸迄宿々問屋中

二月廿八日葛西泊り
同　廿九日稲吉泊り
猶宿々差合候ハヽ、前日泊り江可被申聞候休之儀者行掛りニ相休申候、以上
二月廿八日

覚

一御朱印写　壱通
一御泊り附　壱通
一人馬御触書壱通
〆三通壱包　白木箱ニ入

右者常陸国水戸迄為急御用筑紫宇兵衛様只今早々御出立被成候ニ付、右之通御添被成候間、則差越申候、早々先宿江可被指越候、宿々人馬用意可有之候、尤道中無滞様ニ可被相触候、已上

江戸南伝馬町　小宮善衛門

酉二月廿八日

従千住常陸国水戸迄
宿々問屋中

以書付致啓上候、然者昨覧御継送被遣候御朱印之写・御先触・御添触承知仕候間、其御村迄指戻シ申候条、小幡村御泊りニ而御納可被成候、依而左之通

覚

一御朱印写　壱通　白木箱入
一高山丹衛門様
一加藤重介様

御先触壱通

一御泊り附壱通
一小宮善衛門添触壱通

右之通指遣申候間、御請取可被成候、已上

加藤三郎兵衛
江幡次郎衛門

二月卅日

東崎新五左衛門様
中内銀七様

三七

○(朱)御合力籾手形差出候様御役所ゟ下書相渡候間、左之通認致印形御役所江持参致候

請取申籾之事

一籾拾表者　但四斗弐升入　本四町め問屋　江幡次郎衛門印
一籾拾表者　但四斗弐升入　本五町め問屋　加藤三郎兵衛印

右者問屋役相勤候ニ付、為御合力被下置候間為請取申候、依而如件

明和弐年　芦沢喜兵衛印
酉三月　伊藤孫兵衛印

片岡左兵衛殿
栗田仲衛門殿
西野八兵衛殿

御裏判

佐野孫兵衛
渡辺作衛門
柳原新左衛門印
矢野九郎衛門印

右手形御印形相済、同月十八日ニ相渡り申候、依而御蔵方江手形入申候間、廿五日ニ籾請取申候、依之鼠町御役所江計御礼ニ罷出申候

三八
明和弐酉是ハ心得ニ年号写ノ置
(朱)
○　一三月朔日

上使ニ付北河原甚五衛門様小幡江御出ニ付、長岡迄之人足弐人二月廿九日夜九ッ七八分時今八ッ遣候様ニ申参候、早速歩行夫役江申付五町め市左衛門・長衛門相当候処、段々滞右両人直ニ参申候所、御駕籠之由ニ而勤兼罷帰り人足雇遣候所、最早御出立間ニ合不申罷帰り申候由申出候間、左様ニ而ハ不相成候間、早速御申訳致候様ニ申付候所、最早名主江も致相談候所、此方ゟ御申訳ケ致候筋無之候間、不罷成候趣得心無之候間、我等方ゟ坂戸明学院頼三月朔日ゟ十三日迄廿弐度御訴訟申上候所、御承引無之候而御町奉行様江御断被遊候、尤御断之次第明学院江御沙汰無御座候、十四日ニ六蔵寺ゟ使僧ヲ以御訴訟申上候処、最早昨夕方御町方江断候間、御訴訟不被遊御請之故罷帰り申候由、然者御町方ゟ右之次第甚五衛門方ゟ断在之候間、委細書付出候様ニ被仰付候間、左之通出申候

口上之覚

一去ル二月廿九日夜九ッ七八分之時頃、北河原甚五衛門様より御使旅支度ニ而被参候而申候ハ

一今八ッ時北河原甚五衛門屋敷江人足弐人遣呉候様ニと被申候ニ付、私相答候ハ最早八ッ時ニ罷成候、左様ニ有之候ハ、只今我等と同前ニ人足遣候様ニ頼入候由被申候、左候ハ、歩行夫役江申付早々遣シ可申候由申候得者、御使被帰申候其跡江早速歩行夫役平治郎参候間、至極御意ニ而只今御立被遊候由被仰遣候間、早々人足弐人御屋敷江遣可申候由申付候

一又々間茂無御座御人迎ニ参候間、又々歩行夫役誰成共尋、見当り次第ニ早々最寄ゟ差出候様ニと人遣シ申候得者、左候得者本五町目市左衛門・長衛門両人参候而申候ハ、先刻人足差出候様ニと歩行夫役当テ申候而至極急申候間、我々相勤候御用ニ候ハ、直々相勤可申と存、乍両人御屋敷様江参候得者御駕籠人足之由被申候間、御駕籠人足ハ相勤兼申候ニ付罷帰り人足相雇指上申候所、最早御立被遊候由ニ而相返り候様ニと被仰候間、罷帰り候由申出候

一私申候ハ左様ニ而者相済不申候事ニ候得者、人足同道致御申訳仕人足遣候様ニ可被致候由申候、其後市左衛門・長衛門罷越申候ハ、先刻被申聞候通御組軍介殿江致対談何卒御跡ゟ為追付申候様ニ仕度由相願申候処、近ニも御座候ハ、為追掛ケ可申候得共、長岡迄之内ニハ追付申候事も成兼候、刻限ニ御座候間為追付申候ニも及不申候、追付候刻限ニ候得者先刻人足参候節為追付候得共、間ニ合不申候故人足をも返シ申候間不及其義ニ候、尤四ッ前後ニ申付候人足之事ニ候得者、其元方江只今相当テ候事ニ在之間敷と存候、此義ハ問屋参り候筈

ニ在之候、兎角頭帰後ニ無之候而者相済不申候事ニ候間罷帰り、右之段問屋方江可申聞候由被申候ニ付罷帰り候由申出候、右之段次郎衛門方へ早速為申聞、又々長衛門・市左衛門両人呼申候而申聞候ハ、其元方幸御組衆江心安キ事ニ候ハヽ、手延ニ不致誰ぞ相頼今之内御申訳ヶ被致候ハヽ、縦不相済迚も後々たり合ニも可相成由申候得者、両人申候ハ最早支配之名主江為申聞候得者、其元方より申訳致候筋ニ者無御座候由申候間、御申訳致候義不罷成と答ニ御座候間相返シ申候、其趣次郎衛門方江為申聞候義ニ御座候、右人足之儀者御上使ニ付急御用御大切之御儀と奉恐察候ニ付、御使被参候と直ニ立掛り罷在、随分刻限不相違(カ)候様ニ相勤メ申候得共、件之通ニ御座候而御苦難ニ罷成甚恐入奉存候

孫衛門印

前書孫衛門申上候儀者其夜ハ私義も八ッ時ゟ出張罷有段々之次第承知仕候所、最前御屋敷様へ参候人足御用ニ不相立御帰シ被遊候得者、兎角其辺ニも不罷成義ニ而私役掛り之儀と奉存候得共、深夜之義彼是仕候内及遅滞申候、依之当朔日ゟ坂戸村明学院相頼人足御用ニ不相弁不調法之次第、昨十三日迄日々弐十弐度右院罷出御訴訟申上候処御承引無御座候ニ付、又候六反田村六蔵寺為加勢之相頼使僧を以御訴訟申上候得者、最早御町方江昨夕方相断申候間、御訴訟不被申請候由御挨拶ニ御座候、尤明学院義も又々今昼時参候処、御他行之由ニ而罷帰り申候

右申上候次第御苦難ニ罷成候段、恐入奉存候得共、口上書を以申上候、以上

酉三月十四日　　江幡治郎衛門

御町御役所様

一歩行夫役共ゟも口上書差出シ申候、以上

江幡治郎衛門

去ル朔日

上使為御用北河原甚五衛門小幡村江罷越候ニ付、去月廿九日夜九ッ半時過甚五衛門方ゟ組之者を以申来り候者、今八ッ時人足弐人早々遣候様ニと之儀ニ付、最早八ッ時に相成候段相答候処、早々遣候様ニと申聞候間早速歩行夫役江申付、本五町目市左衛門・長衛門人足出番ニ有之ニ付相達候所、又候間茂なく甚五衛門方ゟ人足催促申来候間、最寄成共早々指遣候様ニ歩行夫役江又々申付、右市左衛門・長衛門方江も催促致候ニ付、早速右両人之者甚五衛門方江罷越候由之所、駕籠人足之由ニ而難相勤立帰り人足相雇可指出と申罷帰り候処、段々刻限遅滞之内甚五衛門方ニ者最早屋敷出立之跡江雇之人足罷越間ニ合不申候ニ付罷帰り候由、其段市左衛門・長衛門罷越申聞候由、尤其節内組之者江及対談候所、追付可罷越と申候処、何程追候而も最早間ニ合不申候間、其段問屋江申達候様ニ挨拶之趣右両人申聞候ニ付、任其意指置候由市左衛門・長衛門右之次第申聞候共　上使御用之儀者別而大切之儀ニ候得者、何程右之者共申聞候共右人足召連早速追付何分ニも甚

五衛門方江申訳ケ之致方茂可有之候所、無其義甚タ不調法之至ニ在之候、畢竟平生孫衛門方江計任置候故、無御用向キ茂相滞候事と旁不調法ニ候、何之呵押込置候条屹ト相慎可罷在者也

酉三月晦日

一右之通被仰付慎居候、右ニ付叔父加藤彦市并恕節右指扣申出候処、其義ニ不及候由被仰付候

一右御呵慎居候得者、御普請方・御買物方御用之諸品如何申参候ハヽ、差扣相納申間敷候哉、内意内々ニ而落合長四郎を頼窺候所相済不申候、吉川甚兵衛殿挨拶ニ十日とも掛り候儀ニ者無之義と見江候、其合指扣候様ニ近所ニ仁衛門と申者も在之と御挨拶ニ御座候由、長四郎方ゟ申参候、尤長四郎申越候ハ仁衛門買納ニ仕可然与申義ニ御座候間、仁衛門方より両役所江納申候、且表ハひしとたて錠おろし置仁衛門方ゟ往来致候、扨々不自由難義ニ御座候上商内一向致不申少シ計壱弐匁宛之商内ニ御座候

江幡次郎衛門

其方儀無念有之ニ付呵押込指置候処致免許候、已来心得違無之様ニ可致者也

四月七日朝

右之通日数七日ニ而御免ニ有之候間、早速店開申候、然ル所当五日ニ烏山外伯父税所恕席死去致候由申立候間、右被仰付ニ茂隣家仁衛門名代ニ差出申候、御礼ニも仁衛門廻シ申候、右不幸ニ付一両日茂店さし可申候所、御呵之内故右店開候而昼時より又々跡先向店江三枚戸さし申候、八日ゟ不残開申候一五町目市左衛門・長衛門も晦日ニ御呵押込被差置候処、長衛門ハ日数五日ニ而五日ニ御免、市左衛門者日数七日ニ而七日ニ御免、是ハ上下茂御免ニ而着致候身柄ニ而、人足ニ罷出候故別而御呵重ク御座候

一同町名主清蔵、是ハ御呵捨ニ而済

明和弐年酉四月御用留より写ス

三九（朱）

○一酉四月廿日ニ五百城軍蔵様御内左嶋多十様ゟ軍蔵様御登ニ付、附出シ軽尻馬壱疋申参候間、駄賃帳江百三拾文と印駄賃請取遣申候所、五百城近江守内住谷治兵衛と申手紙参候間一覧仕候処、先刻相達候人馬之儀軽尻壱疋附出百三拾文ニ相見江候処、近江守方ゟ相達候節ハ八拾四文ニ御座候得共軍蔵方ゟ相達候ニ付、前書之通ニ有之候哉、右之訳ケ御申越可給候、尚更駕籠・長持之義も相訳り候様御申聞可被成候、以上

四月廿日

右之通申参り候、然ル所軍蔵様ニ者御前御小性御役ニ候得ハ百三拾文ニ附差出候儀ニ御座候、近江守様ゟ被仰付候得ハ、御役柄故軽尻五拾六文・人足四拾弐文之割ニ附差上申候事ニ

御座候、五町目江も致相談候所、兎角御役所江一寸御内意ヲ承御指図次第ニ仕可然由相談ニ付、御役所江御内意承候所、其元方了簡之通近江守様と軍蔵様御親子様ニ而御同居被遊候共、軍蔵様ハ御前御小性之義ニ候得者近江守様御同様ニハ不罷成候間、手前ニ而返事も如何敷候間、孫衛門を近江守様御屋敷江遣候様ニ被仰付候間、早速孫衛門遣シ候而口上者次郎衛門罷越御挨拶可仕候所、役所御用ニ而取掛り罷在候故拙者罷越候、先刻賃銭之義御尋ニ候所、大旦那様御用ニ在之候得者返荷並ニ候得共、小旦那様御用ニ被仰付候得ハ百三拾文に相違無御座候、御法通ニ有之候と挨拶仕候所、左候ハヽ、大旦那之用事ニ駄賃帳拵直シ遣可申候間、直シ遣候様ニと御座候間、左様ニ候ハヽ、承知仕候、相直シ遣可申候与答罷帰り申候所、駄賃帳直り参候間、軽尻壱疋五拾六文・人足駕籠長持ニ而六人四拾弐文ツヽニ駄賃帳付遣申候、重而為見合扣置申候

酉四月廿日

明和弐年酉四月御用留より写ス

四〇

○(朱)一明和弐酉五月六日相馬讃岐守様御参勤御通六日夕長岡村御泊り、五町目月番夜五ツ時御通我々江金百疋ツヽ被下置候

一右御通之節、御召替駕籠人足中途ゟ四人之内三人駕籠を捨ぬけ申候故、才料ゟ断御座候間、早速替り人足遣候て長岡御泊り迄同役常照院同道仕申訳ニ参候所、早速無何義も相済申候、夫ゟ上町人足共せんぎ仕候所、残り候一人ハ泉町人足ニ候、上町才料申候ハ駕籠人足札四枚請取申候得共、誰々と申儀相知不申候由、其後度々上町才料せんぎ致候所、後ニ者駕籠人足札ハ請取不申候と違変致、兎角我我せんぎニ而ハ埒明不申候間、御役所ゟ御せんぎ被成候所相訳り不申候由、御役所思召ハ其方共其節人足出辻扣不申候事無念ニ御座候間、相知不申候と被仰候得共、先年ゟ扣不申候事ニ御座候、然者下町之人足面付出候様ニ被仰付差出申候、夫ゟ六月廿日方両人御役所江被召出被仰付ハ、先達而相馬讃岐守殿通候節間違候人足之儀扣無御座候而、歩行夫役共申出ニ計任セ候段無念ニ候ニ付、屹ト申付様も有之候得共、長岡村迄沙門同道内済も致候間、呵捨ニ申付者也

右之通年寄・町頭・名主出座ニ而被仰付候御礼ニ罷出申候

四一

○(朱)一明和弐年酉六月廿四日朝四ツ時相馬讃岐守様御下り御通り、江幡月番ニ而首尾克済申候、尤金百疋ツヽ被下置候

一人足百人程

一馬　百疋程

右之通先触申参候

右御役所人馬相済候者

下町人足　七拾人　　上町　七拾人

下町馬　三拾八疋　上町　拾五疋
門前馬　弐疋　郷村馬七拾七疋
〃人足　百四拾人
〃馬　百三拾弐疋
右遣馬ハ庭帳ニ委細有之候

四二
○(朱)一本田弾正少弼様六月廿九日御下り、江幡氏月番首尾克相済申候、両問屋江金百疋被下置候
先触人足四拾五人
本馬拾壱疋
軽尻八疋
右賃銭六月廿日朝払済申候、尤面付書付持参被置候間、上下人馬割付置無相違済申候
出シ人馬左ニ　人足九拾人　上下ゟ半々
馬　五拾疋　（三拾八疋　下町　拾弐疋　上町）
〃
右遣イ高庭帳ニ有

四三
○(朱)一安藤対馬守様明和弐酉八月十四日御帰国御通り朝六ツ半時也、加藤三郎兵衛月番首尾能済申候、金百疋ツヽ被下置候、且問屋江出張之(カ)町同心衆両人江金弐百疋、御先番三人之衆江金三百疋被下候、行列付両人之衆江ハ不被下候、是ハ被下候ニ不及申候事、扨同心衆内相談ニ而右弐口ニ而五百疋ヲ七人ニ而訳ケ取申候由承候事
馬先触三拾五疋　人馬ハ入用無之由、併分かき等三拾人も可有之候間、心掛ケ呉候様ニと人馬割衆申通候、沙之
人馬五拾人　上下ゟ半々
馬七拾三疋　但シ下町三拾八疋
上町十五疋
郷村弐拾疋
〃
右之通済申候、併塩子江御用通シ馬拾壱疋十二日ニ遣候得ハ、十三日夕ならでハ帰り不申候間、用立不申候故、郷村馬急ニ廿疋願出申候、且十四日御評定日是も四疋入用ニ御座候事
右遣イ馬五町目庭帳ニ有、併人足入用無之と申候処、四拾七人遣申候、馬四拾弐疋遣申候事

四四
○(朱)一明和弐酉八月十六日大公儀朝鮮種人参御掛り田村玄有(カ)左、人参御用ニ而奥州筋江御下り賃人馬ニ而御通り、十六日夕勝倉村御泊り台町ゟ八町目迄組頭弐人御案内ニ出申候、右之玄有(カ)左御小十人之極ニ御座候事

四五
○(朱)一明和弐酉八月十七日朝安藤対馬守様ゟ山野辺兵庫頭様江御状箱足軽飛脚弐人ニ而持参仕候付、吉野屋小兵衛へ宿申付候御返状十八日夕方出即刻立申候

一同十八日七ッ半時御同所様ゟ御使者小林弥五左衛門殿御出役者、御物頭ニ候吉野屋小兵衛宿ヲ申付候、御賄二汁五菜、刀指一汁四菜、中間膳切、尤刀指五人内壱人御進物才料、中間九人・駕籠之者三人・御進物持弐人・上下〆弐拾人、膳後吸物壱ッ・肴弐種、後段吸物肴弐種干菓子并薄茶

御進物　　此品々跡ニ而承候得者、新規故何連も御
干鯛　一折　　請納不被遊候由
昆布　一抱
酒　一荷　但シ樽代ニ而金五百疋

右御家老様中迄口上番添

右十九日ニ於御会所ニ御請被遊候而御地走御座候、御帰り直に被立申候、尤御帰り人馬御地走之御証文出申候、御会所へ御待請御地走之御方

御進物番頭　渡辺作衛門様
御地走附　伊藤孫兵衛様
同　芦沢喜兵衛様
御医師　添田　理庵様
御先手物頭　北河原甚五衛門様
御使役　霜見儀兵衛様
御使役　千葉　六郎様
御徒役　小瀬善三郎様
又　御壱人
〆九人御出被遊候

右御使者十八日ニ御着、早速御役所江委細申上候而、御奉行様ゟ御用人様江被仰遣候

一此方様ゟ右安藤様御使者小林弥五左衛門殿へ銀弐枚被下置候、
御進物才料江　持人両人江

右之通被下置候

四六
○(朱)　口上之覚

一去ル二日昼八ッ過中　御殿表御賄方様ゟ刀指衆壱人被参相尋候ハ、添迄之附出シ・本馬駄賃何程ニ候哉と書付遣候様被申候間、則添迄之御用本馬駄賃八拾弐文と書付仕差上申候、左候得者間も無御座、本馬壱疋只今遣候様ニと御書付左之通御中間衆持参仕申候

覚

一賃本馬　壱疋印　御用人印
々三人印

右者添御　殿御賄方御荷物品々遣候間、中　御殿江只今可被遣候

九月二日　表御賄方

右之通御書付御用人三人と御書被遊候二所江占ヲ懸ケ消候印被

遊上江賃本馬壱疋と御書被遣候間、御使之衆江消候印之訳ヶ承申候得ハ、御用人三人之所馬壱疋ニ罷成候趣故相請取、台町幸内馬遣申候、然者其夜四ッ時品々細カ成ル御荷物附参候而相咄シ申候ハ、早速罷越候所、御荷物揃不申只今漸附出シ申候、尤駄賃銭頂戴可仕と御賄方様へ申上候得ハ、駄賃銭者御町方ゟ相渡候由被仰候間請取不申候、依之私申候者、左候ハ、細ヶ成御荷物殊ニ夜更ニも罷成御才料衆も付不申候得者、随分大切ニ付参御荷物請取持参可仕と申付遣候、左候得者翌三日朝五ッ時罷帰り申候間、如何致延引仕候哉と相尋候得者、御荷物者無相違御渡申上候処、御賄方様ニ而被仰候ハ、夜更ニも候間此方ニ泊り明朝帰り候様ニと達而御留被下候間、逗留仕罷帰り申候、尤御請取書之義頂戴可仕と申上候得共、御遣不被遊候由幸内申出候、依私申候ハ、御請取書持参仕候様ニ堅申付遣候所、御書付請取不参不念之由申候、夫ゟ幸内江申付候ハ、御賄方様江罷越駄賃之義御町方様者何連ゟ頂戴仕候哉、承参候様ニ申付遣候、早速御賄方様江罷越承候得者、雪日之御口上とハ違御買物方ニ而可請取被仰候間、御買物方様江罷越候所、夫ハ御黒鍬方にて相渡り可申候由、又々御黒鍬方様へ罷越候得者、右之御荷物者御用人ニ而遣候御荷物之所、急ニ馬ニ罷成候振ニ及承候、後刻御賄方江聞合可申候間、七ッ時分参候様ニ御挨拶ニ候間、罷帰り候由申出候、依七ッ時分御黒鍬方様へ幸内遣シ申候所、成程此方ニ而引請候間、八町目御用人請負、藤蔵方ニ而相渡候間、藤蔵方江罷越請取候様ニ被仰付候間、藤蔵方にて請取申候、右之通馬方幸内申出ニ御座候

一又々三日七ッ時本馬壱疋申参、茂沢村文蔵と申馬遣申候所、暮合ニ中　御殿付出シ其夜四ッ半過ニ罷帰り申候、尤請取書頂戴可罷帰と申付遣候処、又々御請取ハ不被遣御手紙計被遣候、駄賃銭翌四日ニ御黒鍬方様江右馬方指遣候所、又々八町目藤蔵方江御書付被遣候間、持参仕請取申候

一又々今日も御賄方様ゟ本馬弐疋申参候間、御使之衆へ申候ハ、馬者早速差上可申候、駄賃銭何卒於御賄方様に附出候砌直ニ御渡シ被下候様ニ申遣候、尤本三町目八郎平馬并裏三町目伝衛門馬遣申候、勿論御荷物添　御殿御賄方様江附参候ハ、、御請取書請取参候様ニ申付遣候

右之通中　御殿表賄方様御用賃馬差出申候次第、無相違書上申候、以上

酉　　加藤三郎兵衛
九月五日　　江幡次郎衛門
御町御役所様

四七
(朱)
○　覚

一人足拾四人

此わけ

壱人	具足箱	四人	駕籠
四人	長持	壱人	両掛挟箱
壱人	茶弁当	壱人	竹馬

弐人　山駕籠
〆拾四人
右御先触之通、賃銭先江御通り被成候御手代衆御払被成候
外ニ人足七人寄セ置申候　内壱人　合羽籠
是ハ御先触無御座候品、賃銭相済不申候
壱人　御先見　弐人　荷押イ
是ハ御手代衆御両人乗懸ケ江荷押枝川ゟも付参候間、此方ゟも
長岡村迄付遣申候
〆四人
残人足三人
一馬　六疋　内三疋　本馬
三疋　軽尻
〆六疋
右御先触之通御先江御通被成候御手代衆賃銭御払被成候
外ニ馬弐疋　寄セ置申候
内壱疋　軽尻
是ハ御先触無御座候荷物賃銭相済不申候、尤乗下馬ニ御
座候
残り馬壱疋
右者当十五日朝　御公儀御代官陰山外記様御通ニ付差出申候人
馬数無相違書上申候、以上
加藤三郎兵衛
酉十月　江幡次郎衛門
御町御役所様
右御代官様去ル八月中五町目月番之節奥州検見御用ニ御下り被
遊候処、此度御仕舞御登りニ御座候、以上
明和弐年酉十月

四八
○(朱)磯浜・湊・大貫ゟ江戸江為登候生肴之分長岡村江直出シ
等相達候処、諸肴荷物共ニ長岡村江直出シニ相済候、尤他所出
魚荷物之内磯浜・大貫・湊・平磯之儀者西場・完(ヒカ)戸・笠間・烏
山・太田原・宇都宮・佐野・結城・下舘辺江差出シ候、魚荷之
分者是又只今迄之通下町江相懸ケ、松岡浜々之儀者只今迄之通
相済候段、御町奉行江達之事
右之通御書付八月廿九日御若老衆ゟ御渡候事
如斯ニ候得共、松岡浜之儀不相分候ニ付達延置候、此段其
筋伺合之上亦々追而可相達候得共、先右之段達置候
右之通巳九月中被　仰付ニ御座候、以上
酉十月　江幡次郎衛門
御町御役所様
右御達御尋ニ付、先々役笹嶋金衛門御用留ゟ見出シ書上ケ申候、
尤宝暦十一年巳九月中被　仰付候書付ニ御座候、以上
一都而浜々ゟ江戸江為登候諸肴荷之分者順道往来致候儀勝手次
第ニ候、乍去商人勝手を以　御城下相廻候節者御町之外横道
為致間敷候
一西筋江出候諸肴荷之儀者、大貫・磯・湊・平磯右四ケ所に限

り是迄之通下町江相懸ケ可申候、村松ゟ北浜々ゟ出候分者順路往来勝手次第ニ候

右之通未十二月五日ニ被　仰付候次第書上申候、以上

酉十月　　江幡次郎衛門

御町御役所様

右肴之儀書上候様ニ被　仰付候故、先役孫太郎御用留より見出シ書上申候、以上

酉十月廿七日

四九

○(朱)　書付を以申上候

一先達而人夫拾人・伝馬拾六疋御願申上置候処、納所より人夫拾弐人・伝馬弐拾疋と配府(マヽ)差出候段、此節取込間違不調法之至、何分御容免被成下候様ニ奉願候、以上

向山役者

酉十月五日　　信慧(カ)印

寺社御奉行所

右者常福寺様小河廻シニ而下り候御荷物当初方ニ通候処、件之通間違御申訳之書付御役所ゟ我々江も御達ニ御座候

酉十月八日

五〇

○(朱)　先触

来十六日水戸

御発駕、四日御道中ニ而御参勤被遊候条、御舟渡無滞様ニ心懸可被申候、以上

水戸

平山平次兵衛

酉十月廿八日未上刻ニ出ス

石川左介

緒川　取手

松戸　笠井

右問屋中

先触

十一月十五日出立、三日道中

一人足　三百三拾人

馬　百弐拾疋

同十六日　四日御道中

一人　七百八拾人

馬　四百九拾疋

同十七日　三日四日道中入交リ

一人　百五拾人

馬　百拾疋

同十八日　右同断

一人　五拾人

馬　四拾八疋

右者来月十六日水戸　御発駕、四日御道中にて御参勤被遊候条、前書之通人馬無滞様心懸可被申候、以上

水戸
平山平治兵衛
石川左介

酉十月廿八日未上刻出ス

水戸下町四町目申上刻
長岡　小幡　片倉　竹原　府中
稲吉　中貫　土浦　中村　あら川
牛久　若柴　藤代　取手　我孫子
小金　松戸　笠井　千住

右問屋中

尚々此先触千住ゟ御飛脚之者戻りニ相返シ可被申候、尤早々相廻し可申候、以上

右御先触二通箱ニ入御用部屋ゟ参候間、刻付を以長岡村迄送り遣申候、尤前々我々ゟ添触致候所、此度失念遣シ不申候、重而者ケ様成重立候事ハ添触致遣シ可申候、且又右御先触二通写し御役所江差出シ申候、勿論卯ノ年御参勤之砌御先触写シ并人馬遣高書上、是又為御見合指出シ申候、以上

明和二年酉十月廿八日

申達候御用之儀御座候間、役人衆壱人宛只今御遣可被成候、以上

十一月四日　江幡次郎衛門

高部　喜十様

嶋　与左衛門様
組河原四郎兵衛様
田中五左衛門様
飯沼五郎衛門様
山田　清蔵様
矢口吉左衛門様
金沢武左衛門様
竹内吉郎左衛門様
山田武兵衛様
塩ケ崎伊左衛門様

右廻状之義者近頃人馬相当候所、刻限通不罷出遅滞いたし候間、御役所江相願候者、名主江人馬無遅滞差出申候様ニ被仰付被下置候様ニと相願候処、其方共ゟ申達候様ニと被仰付候ニ付、件之通銘々呼候而申渡候

五一
㊗
○　父母忌引之事

問屋三七日

其外之服忌右ニ准シ勝手次第、尤売買之儀茂尚更勝手次第ニ而、役所江罷出候儀可致遠慮候事

明和弐年酉十一月五日

右之通此度相定候間、可被相達候

右之通年寄衆ゟ相達御座候由、名主ゟ申来候

五二
(朱)
○一御参府ニ付、寄人馬被仰付之次第左ニ

十一月十四日七ツ時寄
一馬　六拾疋　郷村
十五日御用分
同　十五日七ツ時ゟ寄
一同　弐百四拾五疋　郷村
十六日御用分
同　十六日七ツ時ゟ寄
一同　五拾五疋　郷村
十七日御用分
同　十七日七ツ時ゟ寄
一同　九疋　郷村
十八日御用分
同日　同断
一同　拾五疋　下御町
十八日御用分
〆三百八拾四疋
右下町寄馬之分

右之高程上町江茂寄馬被仰付候、尤下金町名主久兵衛所江寄セ候由

十一月十四日七ツ時寄
一人足百六拾五人　下御町
十五日御用分
同　十五日七ツ時ゟ寄
一同　弐百六拾五人　郷村
十六日御用分
同日　同断
一同　百弐拾五人　下御町
十六日御用分
同　十六日七ツ時ゟ寄
一同　七拾五人　下御町
十七日御用分
同　十七日七ツ時ゟ寄
一同　弐拾五人　下御町
十八日御用分
〆六百五拾五人
訳ケ三百九拾人　下御町
弐百六拾五人　郷村
右下御町寄セ人足高也

右之高程上御町江茂寄セ申候由、尤上金町名主兵十方江寄セ申候筈

上下御町寄セ人馬

人足千三百拾人
馬　七百六拾八疋

酉十一月

右之通御書付相渡り申候、尤下御町馬者常論(マヽ)御用、其外岩城・相馬・又者商人荷物等之馬ニ当テ置申候様ニと被仰付候、且又郷村人馬村割者追而可被仰付与御達ニ候、右人馬高御先触之通ニ而過之人馬相済不申候

一十四日夕・同十五日夕帳付ニ平町人之内弐人宛御貸シ被下候様ニ相願候処、前例無之候得共達而願ニ候間、役所一存ニ而相済シ年寄江達候間、左様ニ可心得段被仰付候、四町目・三町目・五町目ゟ両日弐人宛七ツ半時ゟ罷出候筈に名主江申合候

一御町同心衆弐人十五日夕出張被致候由御達ニ候、且又役場前四覧(カ)共ニぼんぼり弐ツ宛付申候筈、蝋燭者上ゟ相渡候

一十一月十二日夜九ツ時御用部屋ゟ御先触左之通参り候間、刻付を以我々添触いたし、歩行夫弐人ニ而内壱人ハ脇指さゝせ為持、長岡江送り申候、尤長岡ゟ請取書取申候

来ル十六日御参府ニ付、御舟渡無滞様心懸申達シ候所、御参府御延引ニ有之候間不及其義ニ候、依申達候、已上

水戸
平山兵治兵衛
石川左介

酉十一月十二日

緒川
取手
松戸
笠井
右問屋中

尚々笠井ゟ戻り御飛脚之者江可被相返候、以上

来ル十六日御参府ニ付、先達而人馬先触申達候所、御参府御延引有之候間、人馬心懸ニ不及候条、其旨意(心カ)得可申候、尤此廻状早々相廻シ千住ゟ戻り御飛脚之者江可被相返候、以上

水戸
平山兵治兵衛
石川左介

十一月十二日子上刻ニ出ス

水戸本町・三町目　長岡　小幡　片倉　竹原
府中　稲吉　中貫　土浦　中村　荒川
牛久　若柴　藤代　取手　我孫子　小金
松戸　笠井　千住
右問屋中

尚々急之義ニ有之候間、刻付を以順達可有之候、以上

右御先触弐通相写シ早速御役所へ持参致候

覚

一御舟渡御先触　壱通

一人馬御先触　　壱通
〆弐通　但シ箱ニ入墨付すれなし
右之通相送り申候間、刻付を以早々御順達可被成候、已上
加藤三郎兵衛
江幡次郎衛門
酉十一月十二日
長岡ゟ
千住迄
宿々御問屋衆中
右之通相認上包いたし上書添触被致、下江江幡次郎衛門
加藤三郎兵衛と相認
メ遣申候
此添触十九日ニ御用部屋ゟ帰り申候
一御役所ゟ七ツ時御達書左之通
先刻被申出候御先触之通、来ル十六日
殿様御発駕之義御延引被仰出候旨御達在之間、寄セ人馬等不及
其義候条、宜可取計候、以上
十一月十二日
右之通被仰付候間、早刻人馬共ニ相止可申候、以上
一名主ゟ町内触左之通十三日朝廻り申候
殿様来ル十六日　御発駕被遊候筈之処、御持病御勝レ不被遊
候旨、其段　公辺江も被　仰達、此度御参府御延引被遊候旨
被　仰出候条、此旨相心得支配々江も可申達候、以上
右之通被仰付候、以上
十一月十三日

五三
(朱)
○一十一月十三日夕長岡村四拾軒程焼失致候ニ付、往来人
馬継之儀両問屋ゟ申参候者、出火ニ付村内取懸り取込罷在候
間、近日之内小幡村迄御通シ被下候様ニ頼申参候間及相談候
処、前々当所出火之砌も枝川迄通シ呉候様ニ頼候事度々御座
候間、任頼ニ可申候趣返事遣候、併遠所之継場二三日之内之
事ハ通シ可申候、若長キ事ニ候ハヽ小竈継可致候間、其元ゟ
小竈江御頼可然と申遣候、左候得者十六日迄何レ左右も無之
間、手前遣候ニハ、人馬遣之義御頼故今日迄小幡村迄通シ候
得共、上下ニハ八里程之道法、朝罷出候人馬夕方ならでハ不
罷帰、跡御用人馬御差支ニ罷成候間、明日ゟ其御村江相送り
候間、左様御心得可被成候、若未夕御取込御引請成不申候ハヽ、
此間も得御意候通小竈村江明日ゟ相送り候間、其元ゟ小竈江
御頼可被成段申遣候、依返事参候ニハ、御紙面之趣致承知候、
御役所江小竈継に相願差出置候得共未被仰付も無之候、しか
し今日小竈村役人御役所江御呼出シニ候間、定而相済候事と
相見候間、一両日之内御世話被下候様ニと頼参候間、任其儀
ニ差置候、然ル所十七日ニ小竈継ニ馬遣候所、小竈ニ而申候
ハ、御役所ゟ当所継ニ今日ゟ被仰付候間、此方ニ而継可申と
申候ニ付、則小竈江荷おろし帰り申候、長岡村ゟハ未否申不
参候、尤十四日ゟ十六日迄三日小幡村迄通シ申候、右小竈継
之義十九日ニ長岡ゟ手前参り候

明和弐年酉十一月

五四
○(朱)　御奉書

大田原伝内殿　阿部伊予守

此状箱従江戸至常陸国水戸大田原伝内所江相届、返札可来候間、於江戸月番之老中江急度可持参者也

酉十二月二日　伊予印

右宿々

外ニ

五百城近江守

大田原伝内様

結城数馬

白井伊豆様

筧　介太夫

右四状二箱長岡ゟ継参早速壱町目於西会所ニ御役所様差上申候

十二月三日申中刻

右御奉書　御返書

阿部伊予守殿　水戸宰相

但伊予守様ゟ参候御添書結付

右御状箱御用人御月番矢野九郎衛門様へ吉川甚兵衛様御出御請取、尤拙者并同心衆弐人、人足三人内壱人脇指さし・又壱人ちようちん持、甚兵衛様御一同罷越、則御状箱甚兵衛様より我等相請取、右歩行夫三人江油紙江包細引かけ相渡し吉田村迄継送り申候、尤吉田ゟ之請取ハ、同心衆一同被参請取被申候刻限十二月三日子ノ上刻

五五
○(朱)　一十一月十三日夕長岡村出火ニ付、人馬小霸ニ而継候所、同廿四日ゟ長岡にて継申候

但シ十四日ゟ十六日迄三日、小幡ニ而継、十七日ゟ廿一日迄五日小霸ニ而継、廿四日ゟ長岡ニ而引請申候、委細者前書有り

五六
○(朱)　御奉書

大田原伝内殿　阿部伊予守

此状箱并霸壱従江戸至常陸国水戸大田原伝内所江相届返札可来候間、於江戸月番之老中江急度可持参者也

酉十二月八日伊予印

右宿中

外ニ

五百城近江守

大田原伝内様

結城数馬

白井伊豆様

筧　介太夫

右御奉書并霧　但シ備後表ニ而包家根仕、青竹ニ而かさき(カ)ニ仕立、長岡ゟ人足都合九人ニ而十二月九日申中刻過着仕候

一早速此方右御奉書之次第、七日夕御達シ御座候間、人足六人夜中者外ニ挑灯持壱人右昼夜詰切、尤御町同心衆弐人、是ハ詰切相待候間、早速御役所江為持参御渡申候

右御返書

阿部伊予守殿　水戸宰相

但シ伊予守様御添書結付

右御返書九日夕四ツ時於中　御殿吉川甚兵衛様・我等御町同心弐人・人足三人罷越、御用人御月番矢野九郎衛門様ゟ甚兵衛様御請取直ニ我等江御渡被成候間、御返書箱見届油紙江包細引掛人足江相渡、吉田村江継送り申候、尤同心衆弐人付参請取持参被致、甚兵衛様へ御納被成候様ニ御達ニ御座候、右人足例之通壱人者脇指さし・又壱人ちやうちん持申候、十二月九日夕四ツ少シ過

五七

○(朱)一去ル九月中枝川問屋ゟ申参候次第失念留不申候間、此度留メ申候

一無事息才、然者私問屋被仰付候後、旁御世話罷成忝仕合奉存候、且又来ル四日方ゟ安良川町前程近ク罷成候、就夫御町商人衆ゟ諸荷物当所継之分、去年中迄者作之衛門問屋相勤罷在候所、去霜月中ゟ拙者問屋ニ罷成候而者、安良川町諸荷物請払初而ニ御座候所、例年之通付出シ等之義商人衆ゟ無相違義とハ奉存候得共、御勝手を以細谷河岸ゟ舟廻ニ被成候而も山田屋九兵衛河岸借請候而請払申候間、万一御心得違ニ而脇河岸江御積送り之義決而不罷成候、此段兼而商人衆中江御達置可被下候、右之趣得御意置申度如斯ニ御座候、万一ニも間違申候而者御相互不宜候儀ニ御座候間、此儀御内和ニ而奉頼入候、以上

九月朔日

猶々送り状名前之義、山田河岸江被遣候共、拙者名前ニ而御送り被下候様ニ是又御達可被下候

右書状石川久介様へ持参仕、挨拶之次第相窺左之通申遣候、此間者御紙面致拝見候、弥御堅勝ニ被成御座候由奉珍重候、然ハ安良川町商人諸荷物川岸場之儀、商人共江申付候様ニと委細被仰聞致披見候、右商人共江申付候儀故障之義御座候間難相成候、併御法も御座候而被仰聞候事ニ候ハヽ、其段委細可被仰聞候、右御略迄早々如斯ニ御座候、以上

九月三日

右枝川ゟ之返書

御再書致拝見候、然者あら川出荷物之儀ニ付、一昨日手紙ヲ以申上候処、御大勢之商人衆故被仰触候義故障有之、難被成段御尤ニ奉存候、尚又右之義御法も有之哉と意味被仰聞候処、差而御法有之と申ニも無御座候、只先年ゟあら川出荷物之分、舟廻ニ而当所脇河岸揚候荷物ニ而も陸地問屋引請可申儀ニ御座候ニ付、先書ニも申上候得キ、併其御許様ニ而右等之儀難被成候ハ、、此方ニ而何分ニも取計申候様ニ可仕候、旁御世話ニ罷成忝奉存候、此上共被添御心被下候様奉願候

御城御用ニ而取込罷在候間、御報延引、尚又御使之衆為待御返書致候段御用捨可被下候、以上

九月三日

右再返書も御役所江懸御目申候

五八

○(朱)一極月十日ゟ五町目月番戌正月廿日迄勤申候、廿一日ゟ手前月番ニ御座候事

五九

○(朱)一御参府正月十八日五町目月番首尾克仕舞申候、諸帳面五町めニ有

六〇

○(朱)一殿様御病気之処、御養生不被遊御叶、二月廿日暁御逝去被為遊候、鳴物・高声・音曲・諸普請・雑(マヽ)生五十日御停止被仰出候

一若殿様御儀

当殿様与可奉唱旨被仰出候、右御悔ニ二月廿二日朝罷出候、二月廿一日夜中被仰出候

右御逝去ニ付、先年殿様方御逝去御　棺御通之砌、問屋前御用留相尋候処、先役共ゟ帳面焼失之趣ニ而両問屋ゟ相渡不申候故、一向次第相知不申候間、金衛門方承候処扣無御座候、又々次郎衛門方尋候所、自分之扣帳ニ委細在之趣則左之通申参候

享保十五年戌四月六日

殿様御逝去被遊御法名

源成公様与御尊骸江戸廿日夜御出棺、御道中御休所

御朝 小金　御昼 取手　御夕 牛久　御朝 中村

御昼 稲吉　御夕 片倉　御朝 長岡　御昼 枝川

御夕 額田

水戸御城下御通朝四ツ半前瑞龍山御着棺、廿四日朝五ツ時右御

書付、十四日御城ニ而御渡シ之写シ也、御役所ゟ写参候

一人足三百弐拾五人　上御町
　但シ　弐百人　下御町
　　百廿五人
一馬　三百六拾壱疋　郷村
　　三百疋
　但シ　弐拾疋　上御町
　　四拾壱疋　下御町前共ニ

右者廿三日明ケ七ツ時ゟ両問屋前江相詰申候

一馬百疋ツヽ　郷村計

廿四日・廿五日両日朝六ツ時ゟ

御当日分

一歩行夫百六拾弐人　笹嶋金衛門所江
伝馬　百八拾疋
賃人足百六拾三人　江川次郎衛門所江
賃馬　百八拾壱疋

覚

一人足百六拾三人　但　上町百人
　　下町六拾三人
　内　四拾人　枝川迄相勤申候
　　拾六人　荷附手伝、長岡村江御先見
　　三拾人　金衛門方へ遣申候
　残り七拾七人　下町三拾壱疋
一馬　百八拾壱疋　郷村百五拾疋
　内　三拾疋　十五ケ村ゟ枝川村迄相勤申候
　　弐疋　嫁馬
　　残百四拾九疋

一魚蝋燭弐拾貫匁掛四挺

是ハ問屋前江夜中ぼんぼりともし申候

右之通　御棺御通被遊候ニ付、枝川村迄相勤申候人馬書付差上申候

覚

一軽尻壱疋　宮田長勢様　一同八疋　山野辺主水正様
一本馬壱疋　山野辺主水正様　一軽尻壱疋　田中伝次郎様
一軽尻壱疋　梶間孫市様　一同（伝馬ニ成ル）壱疋　村上源五郎様
一同　壱疋　五百城軍蔵様　一同　弐疋　奥津蔵人様
一同（伝馬ニ成ル）壱疋　小嶋清勢様　一本馬壱疋　大森茂次郎様
一軽尻壱疋　大森茂次郎様　一軽尻壱疋　井上加内様
一同　壱疋　御普請方　一同　壱疋　大田原久米之介様
一同　壱疋　佐藤次郎衛門様　一同　壱疋　野沢儀衛門様
一同　壱疋　高山勘左衛門様　一本馬壱疋　深沢四方之介様
一軽尻壱疋　深沢四方之介様　一軽尻弐疋　御厩方
一同　壱疋　御目附同心衆

賃馬〆弐拾八疋

此賃銭八百五拾八文、鐚不足ニ有之所、弐疋伝馬ニ成、鐚都合ニ成ル

一賃夫壱人　小笠原薫奄(カ)様一同壱人　河合瓢阿弥様
一同三人　中山庄司左衛門様一同四人　木村鉄五郎様
一同四人　五百城軍蔵様　一同壱人　坂崎仲様
一同弐人　大田原久米之介様一同壱人　落合加内様
一同廿三人　山野辺主水正様
賃夫〆四拾人
此賃銭八百七拾弐文(弐口)
〆壱貫七百九拾文
外ニ同役金衛門方入辻之覚
一歩行夫　百四拾弐人
一伝馬　六拾九疋　六拾七疋之所、弐疋伝馬ニ成ル

右御通被為遊候、廿三日限両方入辻如此也、別紙御書付之通ニ而者馬大分過シ申候、此見合可然様存候
右廿四日・廿五日共ニ郷村寄馬一日ニ百疋宛久慈村・南高野村・釈迦堂村・上小坂・石塚・野田村・下古内・上泉ゟ相詰申候処、賃馬・伝馬共ニ四疋・歩行夫八人ゟ外御用ニ無之候、廿五日も郷村九ヶ村水木・西小勝・磯野・守山・大沼・上古内・大橋・下小坂ゟ参候、御供之節伝馬乗候衆中御登りも伝馬也、又者百石以上者伝馬出不申ニ付随分ニ間違無之様可仕候、上御町ゟ五人・下御町ゟ五人宛両問屋前江指引人壱ヶ所江拾人宛出ル、差引人者組頭又者重立候御町人出申候、御町組衆も壱ヶ所江三人宛御出ニ御座候、差引人多候得ハ却而取込申候、金衛門江六人・私方江六人位ニ而継(カ)御座候、郷村寄馬百疋宛ハ多御座候、勿論御使者之御伝馬ハ御帰り之刻者両穀町ゟ出申候間、上下御町ゟ五拾疋ツヽ、両日ハ出候ハヽ、御間ニ合候儀と御先之歩行夫ハ廿四日八人、廿五日ニ馬弐拾疋・歩行夫拾三人、廿六日ニ伝馬三疋・歩行夫二人如斯入申候間、以後者右之心得ニ可仕事、御棺御通之則(マヽ)私金衛門ハ上下着、脇指帯罷出候、手前之前江無役之者ハ罷出候事不罷成、尚又脇指ハ指不申候
一御棺御通被遊候節、御供人馬・入辻伝馬三町目ニ而勤申候分、伝馬六拾九疋・歩行夫百四拾弐人也、ヶ様之節ニハ伝馬前々問屋前江御町御口書衆両人共御出ニ而、無証文ニ見済被通候、尤塙吉左衛門殿・軍司林平殿御出ニ候、且承ニ物成百石ゟ以下ハ伝馬被出候旨ニ御座候、尤御帰り之節も伝馬出候衆中江ハ伝馬出シ申候、窺之上ニ而出シ申候事
一御供之衆御帰り之節、江戸衆ニ而ハ御知人も無之、宿申付呉候様ニと御頼之衆中数多御座候処、七軒町ゟ四町目迄御使者宿被仰付候ニ付、窺之上六町目迄申付候様ニと被仰付候、尤当時御使者も御出無之候、宿屋江ハ申付不苦候由ニ被仰付候

四月廿四日
一馬百疋　郷村八ヶ村ゟ寄
内　賃馬壱疋　たれ様　伝馬壱疋　同
伝馬壱疋　同　同　壱疋　同
残り九拾六疋

同日
一人足拾人　下御町
内　歩行夫八人　表御坊主衆長持壱棹

残り弐人

同廿五日
一馬百疋　郷村九ヶ村ゟ

内　三疋　伝馬たれ様江　同壱疋　伝馬たれ様へ
弐疋　同断　賃馬弐疋　同断

此行九行馬数此分共ニ十三疋、外ニ嫌馬壱疋都合廿疋、残り八拾疋

同日
一人足拾人　下御町

内　賃人足四人　たれ様　同壱人　同
残り五人

右者御
尊棺御通被為遊候節、御供ニ而御通被成候御方様御帰り被成候刻、廿四日・廿五日人馬問屋前江寄セ、人馬長岡村迄相勤申候書付指上申候、以上

戌五月　問屋　江川次郎衛門

右我等一名ニ而五月十二日ニ出シ申候
右之通江川次郎衛門方ゟ此度書付参候ニ付、刻左之通り御役所へ書上申候

覚

享保十五年戌四月廿三日朝七ッ時ゟ
一人足三百弐拾五人

但　弐百人　上御町
百廿五人　下御町

訳

歩行夫百六拾弐人　笹嶋金衛門所江
賃夫　百六拾三人　江川次郎衛門所江
四拾人　枝川村迄相勤申候
内拾六人　問屋前荷付手伝并長岡村へ御先見ニ遣申候
三拾人　金衛門方ニ而遣申候
残り人足七拾七人

（裏表紙）
「　佐藤五右衛門　」